

ごあいさつ

板橋区は、昭和60年1月1日に世界の恒久平和を願い、「板橋区平和都市宣言」を行いました。以来、この宣言を実りあるものとするため、現在に至るまで様々な平和都市宣言記念事業を実施し、「戦争の悲惨さ、平和の尊さ」を訴え続けています。

『次世代を担う子どもたちに平和の大切さを伝える』このような思いを込めて行っているのが「中学生平和の旅」です。今年度も被爆地である広島及び長崎に区立中学生を各23名、計46名を派遣しました。この文集は、平和の旅を通して学んだ貴重な経験と、現地で感じたそれぞれの「平和への想い」を自分自身の言葉で綴ったものです。

人類共通の願いである平和を、私たちは本当の意味で手にしたことはありません。それは、世界には今でも多くの核兵器が存在し、人類の滅亡さえ危惧される核戦争がすぐにでも起こる危険性の中で私たちは生きています。また、世界では民族・地域紛争などにより、子どもを含む多くの死傷者が後を絶たず、私たちの願いである世界平和の実現をより困難なものにしているからです。

この感想文集を一人でも多くの方にご覧いただき、「平和の尊さ、大切さ」に対する認識を深め、あらためて「平和」について考えるきっかけとなっていただければ幸いです。

これからも、板橋区は、平和都市宣言記念事業を積極的に推進し、世界の恒久平和を実現するため、様々な機会を捉えて、「平和の心」を発信してまいります。

最後になりましたが、本事業の実施及び感想文集の発行にご協力いただきました、関係者の皆様方に心より感謝申し上げます、ご挨拶とさせていただきます。

平成28年11月

板橋区長

坂本 健



目 次

ごあいさつ	1
第1部 中学生広島平和の旅	
1. 行程表	4
2. 団長感想文	5
3. 参加中学生感想文	6
第2部 中学生長崎平和の旅	
1. 行程表	30
2. 団長感想文	31
3. 参加中学生感想文	32
第3部 資料編	
1. 広島	
(1) 広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式次第	58
(2) 平和宣言	59
(3) 平和への誓い	61
2. 長崎	
(1) 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典次第	63
(2) 長崎平和宣言	64
(3) 平和への誓い	66

■広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式出席議員

佐々木 としたか	議員	川 口 雅 敏	議員
はぎわら 洋一	議員	成 島 ゆかり	議員
山 内 えり	議員	松 島 通 昌	議員

■長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典出席議員

菊 田 順 一	議員	元 山 芳 行	議員
しば 佳代子	議員	竹 内 愛	議員
高 沢 一 基	議員		

第1部

第22回 中学生広島平和の旅



原爆ドーム前にて

参加生徒

板橋第一中学校	古川 未悠	志村第四中学校	本木 翔梧	向原中学校	和氣野乃佳
板橋第二中学校	中村江梨香	志村第五中学校	伊東 秀真	赤塚第一中学校	福井 桜愛
板橋第三中学校	高野 彩花	西台中学校	星 有綾	赤塚第二中学校	岡村 萌里
板橋第五中学校	木村 由夏	中台中学校	曾根原 輝	赤塚第三中学校	杉山愛香音
加賀中学校	斉藤 裕吾	上板橋第一中学校	川崎 光莉	高島第一中学校	北川 杏
志村第一中学校	井上 紗那	上板橋第二中学校	數藤 優里	高島第二中学校	小野 初花
志村第二中学校	澤村 琴美	上板橋第三中学校	石黒 遥	高島第三中学校	久保田 璃子
志村第三中学校	永田 柚奈	桜川中学校	小川 凜		

引率者

赤塚第二中学校	宮澤 一則校長(団長)	邑松 雅仁教諭(指導員)	中島 有香子教諭(指導員)
---------	-------------	--------------	---------------

中学生広島平和の旅 行程表

実施期間 平成28年8月5日～7日（2泊3日）

8月5日(金)

時間	行動内容
7:00	板橋区役所集合・出発式
7:20	板橋区役所 発
7:50	東京駅 着
8:10	東京駅 発
12:10	広島駅 着
12:40	広島駅 発(市電)
13:00	広島市役所 着
13:10	★ヒロシマ青少年平和の集い受付
13:30～17:00	★開会式(開会挨拶、参加自治体紹介) ★平和学習会(被爆体験講話、ワークショップ、発表) ★閉会式(講評、参加証書の手交)
17:30	ホテル 着
19:00	夕食
21:30	就寝

8月6日(土)

時間	行動内容
5:00	起床
6:00	朝食
6:40	ホテル 発(徒歩)
6:50	平和記念公園 着
8:00～9:00	平和記念式典参列
9:30～14:00	観光・昼食
15:00	ホテル 着
15:30～17:30	学習会
18:00	灯籠流し体験
19:00	夕食
19:50	灯籠流し見学
22:00	就寝

8月7日(日)

時間	行動内容
6:00	起床
7:00	朝食
8:20	ホテル発(観光バス)
8:30	平和記念公園 着(公園内見学、献花)
9:30～11:00	平和記念資料館等見学
11:10	平和記念公園 発(観光バス)
11:20	広島駅 着
12:30	広島駅 発
16:30	東京駅 着
17:20	板橋区役所着・解散式

★はヒロシマ青少年平和の集い事業(広島市主催)

平和をつなぐ

第22回中学生広島平和の旅
団 長 宮 澤 一 則
(赤塚第二中学校長)

現在の日本は、世界の中でも平和な国と言われています。しかし、平和な国を築くためには「決して戦争を起こさない」「二度と悲しい思いはしたくない」という先人の強い願いや多くの努力があったはずです。先の戦争が終わり71年の年月が過ぎ、平和な社会が当たり前のような生活を過ごしている中、最も恐れなくてはいけないことは、戦争の悲惨さ、先人たちの涙ぐましい努力を風化させてしまうことです。平和な社会を維持・発展させていくためには、核兵器根絶と恒久平和を強く訴え、次の世代に引き継ぐ必要があります。これらのことが、「中学生広島平和の旅」のねらいであり、唯一の被爆国である日本に課せられた責任だと思えます。

今回の「中学生広島平和の旅」では、感受性の高い中学生に、戦争の悲惨さ、平和の尊さを身体全体で体験する機会をいただき本当に感謝しております。「ヒロシマ青少年平和の集い」におけるワークショップ、被爆体験者からの講話、そして「平和記念式典」の参列や灯籠流し、さらに「平和記念資料館」の参観をとおして、生徒たちの心には大きな衝撃が伝わったことでしょう。

「被爆体験者からの講話」では、戦争当時の小中学生の様子が現在の子どもたちと違って、厳しい環境にあったこと、その中で家族や友人と一生懸命生きていたこと、そして想像もつかないほどの悲しみがあったことを感じました。「平和記念式典」における、こども代表の「平和への誓い」の結びには「私たちには、被爆者から託された声を伝える責任があるのです。一人一人が、自分の言葉で、丁寧に、戦争を知らない人へ 次の人へ 世界の人へ 命の尊さを 平和への願いを 私たちが伝えてまいります。」という言葉が記されていました。小学6年生の言葉でしたが、参列した者に強く、しっかりと響いてきました。この意志は、生徒たちにも引き継がれたと確信しています。また、「平和記念資料館」では、原爆によって剥がれた爪や垂れ下がった皮膚の写真、高熱で溶けたガラス瓶や時計など、直接、自分の目で見ることによって、ぐらぐらと大きく心が揺さぶられたようでした。中には、その場から動けなくなる生徒もいるほどでした。

今回の「中学生広島平和の旅」は、2泊3日の行程で終了とは考えていません。むしろ、これからが本番だと思います。生徒たちが見て、感じたことをそれぞれの学校に持ち帰り、全校生徒に伝えることが重要です。さらに、平和な社会を築くため、そして、生命を大切にした生き方をするために、今、何ができるのか、どのようなことをしなければいけないのか、参加した生徒が発信していく責任があると思えます。

今回参加した23名の生徒は、各学校の代表として選ばれました。どの生徒も、それにふさわしい立派な生徒でした。必ずや「中学生広島平和の旅」で感じたこと、学んだことを各学校や地域へ発信し、平和な社会の構築に貢献してくれると信じています。そして、「平和をつなぐ」中心となって努力してくれることでしょう。

「戦争の悲惨さ、平和の尊さ」

～広島平和の旅に参加して～

板橋第一中学校 2年 古川 未悠

広島に原子爆弾が落とされて71年、感じることの難しくなっていく戦争の悲惨さと平和の尊さ。私たちは戦争とは何か、平和とは何かを学ぶことができました。

～ヒロシマ青少年平和の集いに参加して～

1日目、私たちはヒロシマ青少年平和の集いに参加しました。そこで私たちは、広島市の中・高校生ピースクラブの皆さんの原爆被害の概要説明や、講師の笠岡貞江さんの被爆体験証言を聞いてきました。その話は聞いていることが辛いほど、悲しくて残酷でした。今の平和な日常を当たり前のように過ごせている私たちは、とても幸せ者だと改めて感じました。

～平和記念式典に参列して～

2日目、私たちは平和記念式典に参列しました。8月6日の午前8時15分、71年前に広島に原子爆弾が落とされました。平和の鐘を鳴らして、1分間の黙とうが行われました。その短い時間は、とても長く感じました。この日の夜には灯籠流しもありました。私たちも灯籠を作り、川に流しました。「平和」「争い事など二度としない」など、皆それぞれの思いを和紙に書き込みました。川に流れていく灯籠は、まるでこの平和を願う思いを未来に伝えていくように見えました。

～平和記念資料館を見学して～

3日目、私たちは平和記念資料館を見学しました。広島に落とされた原子爆弾「リトル・ボーイ」や、鶴、黒い雨、平和への歩みなど、沢山の事について学ぶことができました。また、千羽鶴を奉納するという貴重な体験もさせて頂きました。この千羽鶴に込められている沢山の人の思いを、千羽鶴の重さから感じました。

～最後に～

この3日間で、私たちは沢山の貴重な体験をして、様々な事を学ぶことができました。私たちの住んでいる板橋区は、平和都市宣言の町です。私たちはこれからも平和について考え、今回学んできた事を沢山の人の人に伝えていきます。

平和とは

板橋第二中学校 2年 中村 江梨香

私は戦争の悲惨さ、平和の尊さを1人でも多くの人に伝えたいと思って、「広島平和の旅」に参加しました。この3日間の中で平和への願いがより一層強くなりました。

【ヒロシマ青少年平和の集い】広島市で平和を広める活動をしているピースクラブの皆さんと「平和とはなにか」を考え、話し合っ発表しました。皆それぞれ考え方が違い、意見を深めることができました。また、被爆体験をした笠岡貞江さんのお話を聞きました。笠岡さんは戦争の恐怖を色々な言葉で教えてくださいました。その中で一番印象が強く、心に残った言葉は『核兵器がこの世からなくなれば慰霊碑は消える。核兵器が少なくなっ欲しいのではなくて、なくなっ欲しい。』この言葉を聞いたとき、本当の戦争の怖さを伝えられた気がします。私が考えるようなものではないと、改めて思いました。最後に笠岡さんは『平和とは愛の心』そうおっしゃいました。相手を思いやる心、温かい心が大切なのだと。

【平和記念式典】短い時間でしたが平和を願う、とても大切な時間だと思いました。内閣総理大臣をはじめ、多くの方々からの献花、平和の鐘と黙とう、平和宣言から放鳩まですべて私達の心に響きました。きっと被爆者の方々にも想いは届いていると思います。平和への誓いでは、小学6年生の2人が想いを語ってくれました。戦争、原爆に対する想いがとても強く伝わりました。また式典には幼稚園児や小学生もいて、平和への願いは世代を問わないと思いました。

【灯籠流し】ここでも小さな子からお年寄りまで、さらには、戦争に関心がないといわれている年代の人もありました。皆、伝え方は様々ですが、平和への願いがあるように思えました。

【平和記念公園】ここには平和を願って作られたものがたくさんあります。その中でも「原爆の子の像」の物語は忘れられません。この像は被爆の10年後、白血病に苦しめられ亡くなった佐々木禎子さんの同級生が中心となり、造られました。今なお人々を苦しめ続けている原爆を許すことはできません。

【平和記念式典・原爆ドーム】どちらも目を覆うものがありました。原爆ドームからは原爆の破壊力、恐ろしさが伝わってきました。資料館では全身が焼け皮膚がただれている人がリアルに再現され、声も出ませんでした。また被爆者の方々が当時の様子を語っているビデオを見て、原爆は多くの人や動物、物を傷つけたのだと思いました。

【私の考える平和】戦争、原爆は人を選びません。夢に向かって頑張っていた人も、生まれたばかりの赤ちゃんも。人に限らず、動物、植物も犠牲になります。こう考えると、今自分がここに生きていられるのは平和だからだと言えます。この平和が世界中に広がって欲しい。私の考える幸せは皆が笑顔でいられることです。皆が笑えることは素晴らしいことです。私達が笑顔でいられるように平和を守り続けるのです。

あの日

板橋第三中学校 2年 高野 彩花

「私たちが望んでいるのは核兵器を減らすことではありません。核兵器を無くすことです。」

私はこの言葉が一番印象に残っています。これはヒロシマ青少年平和の集いでの被爆体験者のお話の中に出てきた言葉です。私はこの言葉にとっても重みを感じました。

世界にはおよそ1万5千発以上の核兵器があります。無くすということはそれを0にするということです。考えてみるととても大変です。しかし、実現に向けて努力していかなくてはなりません。

1945年8月6日8時15分、島病院の上空に約4tの原子爆弾（リトルボーイ）が落とされました。そして、想像を絶する威力で老若男女を問わず無差別に苦しめました。その被害は今でも続いています。この原子爆弾の影響で亡くなられた方は14万人にもなります。その一人一人にこれからの人生や未来があり、大切な大切な命だったはずですが、それを思うだけで胸が痛みます。目は見開いたまま、ギザギザでザクロのような唇をし、ひっくり返りながら、水を求め、亡くなっていく人々…。どんなにひどくてもこれから労働できないお年寄りなどは、病院で診てもらえず苦しみながら亡くなっていきました。そして亡くなった人は人間として扱われず、丸太のように山積みになれ、油をかけられ焼かれていき、また処理しきれずに山積みになれたままということもあったそうです。ここには書ききれないほどたくさんの残酷なことがあったことも聞きました。

あの日被害者の遺品などが展示されている平和記念資料館には、被害の大きさを物語る想像以上のものがありました。ボロボロになった服、焦げた髪の毛、黒くなったお弁当など、見ていくほど言葉では表すことのできないような悲しい気持ちになりました。しかしそれと同時に「戦争は絶対にしてはいけない」、「世界に平和を広げなくては」と強く思いました。

戦争は人を人ではなくさせ、仲間であるはずの人間を傷つけます。戦争では誰も幸せにならない、夢や希望、大切なもの、人の笑顔、命が失われていくだけです。戦争は絶対に起こしてはいけない、私はこの平和の旅で戦争の悲惨さを学び、より一層平和への意識が高まりました。

この旅に関わってくださったすべての方々に感謝し、世界に平和を届けていける人になりたいと思います。本当にありがとうございました。

広島への思い

板橋第五中学校 2年 木村 由夏

＊はじめに＊

私は、広島の平和について学ぶために3日間実際に広島へ行ってきました。この旅を通して、広島へ対する原爆投下の悲惨さや被爆者の方の願いといった色々な思いを、改めて感じることができました。

・1日目

ヒロシマ青少年平和の集いでは、全国各地から集まった生徒たちと交流をしながら広島
の平和について話し合っ発表したり、実際に被爆者の方のお話を聞いたりしました。私
は被爆者の方のお話にとても心が打たれました。感動してしまい、涙が出てしまいました。
私は被爆者の方のお話を聞いて、経験したことはありませんが、一瞬にして多くの命が奪
われたことが容易に想像でき、とても悲しい思いをしました。

私は絶対にこのような過ちを二度と起こしてはならないと思いました。戦争とは、一瞬
にして多くの命を奪う恐ろしいものなのだを改めて感じることで集いでした。

・2日目

平和記念式典では安倍内閣総理大臣をはじめ、遺族の方々や被爆者の方々の原爆に対す
る思いがより伝わってきました。遺族や被爆者の方々の話を聞き、戦争とは本当に恐ろ
しいものなのだを、平和記念式典を通して改めて気付くことができました。

灯籠流しでは自分なりに灯籠に平和への思いを書いて、一人でも多くの方に私の思いが
届くようにと願いながら流しました。私には広島の方々にずっと笑顔でいてほしいという
願いがあります。その願いを叶えるためには、二度と戦争のように恐ろしいものを起こさ
ないことが笑顔に繋がると思います。

・3日目

平和記念公園を見学しました。原爆投下の悲惨さを建物が物語っていて、胸が痛くなり
ました。原爆ドームはそのまま残してあり、見ていてとても辛かったです。献花させても
らったときは、ずっと平和でありますようにと願いを込めて献花しました。

資料館では、沢山の戦争の悲惨さを伝えるものや遺品などがあって、さらに悲しくなり
ました。

3日間を通して、戦争はあってはいけないと心から感じることができました。

被爆地ヒロシマに行って

加賀中学校 2年 齊藤 裕吾

今回、私が参加させていただいた広島平和の旅は大変有意義なものでした。

被爆から71年を迎え、被爆者の平均年齢は80.86歳になり、五月には原爆を投下したアメリカの現職大統領バラク・オバマ氏が初めて広島を訪れました。私達は今、何を考えていかねばならないのでしょうか。

1日目の「ヒロシマ青少年平和の集い」で聞かせていただいた被爆者の笠岡貞江さんの話には背筋が凍りつきました。笠岡さんは12歳の時、爆心地から3.5kmの所で被爆しました。笠岡さんから聞いた全身を真っ黒にやけどし、ウジ虫がわいたお父さんの話や水を求めて行列を作る、肌がただれた人たちの話はとても想像できませんでした。「とても悔しい」「これからの未来をどうぞよろしくお願いします」と言われたとき、この悲惨な過去を遠い昔の出来事として風化させてはならないと強く思いました。

2日目に参加した平和記念式典では様々な国の代表者が参列していました。一般席にも外国の方が多く座っていました。71年前の8時15分、この青空の下に歴史上初の原子爆弾が落とされ、この地面の上で多くの人々の命が奪われていったと思うと、核兵器の恐ろしさを改めて確認させられました。

3日目は平和記念資料館に行きました。ここには目を覆いたくなるような原爆の資料が保管されていました。焼け焦げて亡くなった人の服や、高温で泡を吹いた瓦など様々な資料のほかに、長年にわたり放射能の被害に苦しむ人々の資料も展示してありました。特に印象に残ったのは8時15分で止まった時計です。本当にこの時間に多くの人々の時間が止まってしまったのだと実感しました。



この広島平和の旅では教科書やインターネットでは学べないことが学べました。実際に被爆地に行くことで普段の生活では感じられない戦争の残酷さ、平和の有難さがよく伝わってきます。我々は戦争や原爆を体験することはできません。しかし、被爆者の苦しみを理解することはできます。想像することはできます。被爆者の声が聞こえるうちに戦争、原爆の実態を知り、二度と同じ過ちが繰り返されないように後世に伝える義務が今を生きる我々にはあると思います。

広島平和の旅に参加して

志村第一中学校 2年 井上 紗那

あなたにとって、平和とは何ですか。

－ 1 日目 －

ヒロシマ青少年平和の集いに参加しました。

平和の集いでは、実際に被爆された方のお話を生で聞けるととても貴重な体験をさせていただきました。講師の笠岡貞江さんは、あの日を思い出すだけでも辛くて胸が締め付けられそうだと話していました。

内容は生々しく、爆風により皮膚が垂れ下がる人や、熱線による被害で爆心地から1.4 kmにいた人々は致命的熱傷を負い、爆心地から3.5 kmにいた人々は人体に1度の熱傷を負ったなどです。今では到底考えられないことばかりでした。

－ 2 日目 －

平和記念式典に参加しました。

式典には約90カ国の人々が参加しました。外国の方々がたくさんいらっしゃり、71年前のこの日に興味をもってきているのだな、と大変感動しました。式典が始まり少しすると、平和の鐘が鳴り響く中、1分間の黙とうが行われました。その後は、子ども代表による平和への誓いでした。小学6年生がとても上手に読んでいて驚きました。灯籠流しでは、私の平和への思いをびっしり書きました。

－ 3 日目 －

平和記念資料館に行きました。

私の目がある展示品にとまりました。それは服も皮膚もぼろぼろになっているものでした。皮膚は服と同じように垂れ下がっていて、もはや私の知っている人間の姿ではありませんでした。他にも、焦げた弁当箱や三輪車。当時3歳の子が乗っていましたが、即死亡。館内には生々しい写真が沢山あります。

－ まとめ －

最初に書いた質問、考えてくださいましたか。

私が考える平和とは、争いがないことだと思います。争いがなければこの世界は変わると思います。そのためにはまず、友達を大切にしていきたいと思います。そして、次世代を担う私達が平和への呼びかけをしていきたいと思います。

広島平和の旅に参加して

志村第二中学校 2年 澤村 琴美

1945年8月6日8時15分の出来事。

この広島平和の旅に参加して『平和』がどれだけ大切なものなのかを考えることができました。

〈ヒロシマ青少年平和の集いに参加して〉

一日目は被爆体験をされた笠岡さんの話を聞き、胸がいっぱいになりました。聞いていくうちに想像をはるかに超える被爆体験があり、ただただぼう然と聞くことしかできませんでした。私たちと同じぐらいの子たちが勉強をせずに戦争のために働く。仲の良かった友達、両親、家を失う。今、自分がもし一つの原爆によってそうなったらと考えると怖いなと思いました。

〈平和記念式典に参列して〉

平和記念式典では日本の方々だけでなく海外の方々も多く参列していました。この式典で印象に残ったことがありました。それは小学生による平和の誓いです。私たちより年下の子たちが平和について一生懸命伝えているところが、私にとって強く印象に残っています。式典ではたくさんの方々が『平和』を願っているということを感じることができました。

〈平和記念資料館に行って〉

平和記念資料館には目を背けたくなるような写真、実物がたくさんありました。これが現実起きたことだと思えませんでした。原爆の恐ろしさを改めて学ぶことができました。

〈まとめ〉

今回の広島平和の旅では原爆の恐ろしさ、二度と戦争を起こしてはいけないということを学ぶことができました。私たちが学んだ71年前の出来事を一人でも多くの人に伝えていきたい。また、核兵器ゼロを訴え、一日でも早く平和な世界をつくらせていきたいと私は思います。

平和と広島

志村第三中学校 2年 永田 柚奈

1945年8月6日午前8時15分。起きてはいけなかった惨劇が、広島で起こりました。木はなぎ倒され、建物は破壊され、一瞬にして人々の日常は奪われ、実に多くの人々が苦しみながら死んでいきました。そしてこのことは、そう遠くない過去にあったということ、私は広島に行って初めて肌で感じました。

1日目 ヒロシマ青少年平和の集いに参加し、被爆者の体験談を聞きました。病院に行っても診てもらえず、真っ黒になって運ばれてきた父を看護したとき、死体や負傷者が山積みになった川に行ったとき、死体を燃やした炎から出る魂を見たとき…被爆者の体験談はあまりに残酷な現実でした。死んだ自分の親を見て、一体どんな気持ちだったのだろうと考えると、私は胸が張り裂けそうになります。被爆者にしかわからない苦しみや思いは、私たちが伝えていかなければいけないのだと、改めて感じました。

2日目 平和記念式典に参加しました。内閣総理大臣、国際連合事務総長などの、平和への思いを聞くことができました。特に子供代表の誓いの言葉は心に響きました。「絶対に悲劇を繰り返してはいけない。」という決意は見ている人たちの心にも届いたと思います。私は式典に参加しながら改めて、今の平和な暮らしに感謝しました。そして核兵器のない世界の実現には、全ての人々が協力し合うことが大切だと考えました。

同日の灯籠流しは、本当に綺麗な光の数々でした。人々の平和への願いが込められた灯籠が夜の川に流れる光景は、とても感動的で、私は不思議な気持ちになりました。

3日目 最終日は平和記念資料館に行きました。中でも丸焦げのお弁当、8時15分を指したままの時計、放射能や黒い雨についての資料が印象に残りました。遺品の説明書きには、その人たちにあるはずだった未来が書かれています。その未来が一瞬で奪われたことを思うと本当に切なくなりました。資料だけでなく、壁に描かれた当時の様子と全身に火傷を負った人の人形が、まるでその場にいるようでした。

被爆者の方々は当時、言葉では言い表せないほど酷い光景だったと言います。この惨劇は繰り返してはいけない、私は改めて思います。戦争は人から全てを奪うこと、核兵器は必要ないこと。それを私たちは伝えていかなければいけないのです。そして、いつしか平和の輪が広がり、全ての人々が笑顔でいられるような世界を願います。



風化させてはならない過去の歴史

志村第四中学校 2年 本木 翔梧

私は、8月5日から7日まで広島平和の旅に参加し、本やインターネットでは調べることのできない、現地でしか感じることであり、貴重な体験をしてきました。

～笠原さんの話～

1日目に被爆された笠原貞江さんの話を聞くことができました。当時笠原さんは、爆心地3.5kmの所にいましたが無事でした。しかし、原子爆弾によって両親の命を奪われたと聞きました。その時の様子を笠原さんは、「この世の地獄を見た」と語っておられました。笠原さんは話している最中に気持ちが高ぶっていました。これは、当時の忘れることのできない悲しみや苦しみを今なお抱えているのだと感じました。笠原さんの話を聞き、たった一発の原子爆弾が平和に過ごしていた人々の命を奪い、生き延びた人々にも心と体へ大きな傷を負わせた残虐な兵器だと感じました。

～平和記念公園を巡って～

次に私が衝撃を受けたのは平和記念公園です。特に平和公園の中にある平和記念資料館に衝撃を受けました。平和記念資料館では、熱線で瓦が溶けてしまったり、放射線を浴びたために皮膚に紫色の斑点ができてしまったり、ケロイドになってしまった状況など生々しい写真や資料を目の当たりにしました。これを見て私は平和の尊さや原子爆弾の恐怖を改めて知りました。また、5月下旬に訪れた米国首相バラク・オバマ氏が折った折り鶴も展示されていました。折り鶴を平和の象徴として、世界に発信する運動が進められています。私たちも折り鶴を折り、平和記念公園に納めて世界平和への祈りを捧げました。

今回、広島平和の旅では本当に有意義な3日間を過ごすことができました。今、被爆された方々の平均年齢は年々上がっています。いつかは被爆された方々から直接話を聞くことができなくなってしまいます。私には平和の尊さや原子爆弾の恐怖を伝えていく使命があると感じました。学校の仲間や地域の方々など多くの方に、今回の旅の経験を伝えたいと思います。



原爆ドーム



熱線で溶けたガラス



オバマ氏が折った折り鶴

伝えていく

志村第五中学校 2年 伊東 秀真

初日の青少年ヒロシマ平和の集いでは、爆心地から3.5km離れたところで被爆された笠岡貞江さんのお話を聞きました。貞江さんは原爆によって両親を亡くされました。貞江さんのお父様は全身に負った火傷のせいで、声を聞くまでは娘である貞江さんですら話している人物が誰であるか分からないほどに真っ黒になっていたそうです。そしてその2日後に亡くなられたそうです。

貞江さん自身も原爆が落ちた直後は特に異変がありませんでしたが、しばらくすると吹き出物が体のあちこちにでき、貧血も続きました。その後、貞江さんは被爆者ということで就職試験に落ち、お見合いをしても結婚できなかったそうです。両親、心、将来を傷つけた原爆を貞江さんは『悪の塊』と言っています。確かにその通りだと、私も思います。もし原爆が投下されなければ、多くの方の夢や希望が実現していたことでしょう。たった1つの原子爆弾によって、多くの方の将来が打ち砕かれたのです。現在アメリカでは、第二次世界大戦を早期に終結させるためには広島に原子爆弾を投下したことは仕方がないと考える人が5割以上いると言われていています。しかし、日本で同様の質問をすると約8割の人が投下するべきではなかったと回答しています。このように国によって違いはありますが、原爆による被害がどのようなものであったのかという事実を、正しい知識として身に付けなければいけません。そのため、広島平和の旅に参加し、被爆した方の大変貴重なお話を聞くことができ良かったと思います。

翌日は平和記念式典に参加しました。この式典には約90もの国からの参列者が出席しました。この式典で広島の小学生在が『平和への誓い』を行いました。その中で、「私たちには被爆者から託された声を伝えていく責任があるのです。」という一文がありました。この責任は私にもあります。私は原爆を直接体験したわけではありません。しかし被爆者の方からお話を聞き、伝えることができます。10年後、20年後の人々にも原爆を絶対に使用してはならないということ、そして戦争がどれだけ悲しいものであるかを伝えていきたいです。



最後に、71年前の8月6日に比べると日本はとても平和だと思います。しかし世界はどうでしょうか。今なお多くの核兵器がこの地球上には存在しています。いつの日か、そんな恐ろしい兵器が無くなるように、小さな小さな力ではありますが広島平和の旅で学んだ原爆の悲惨さを伝え続けます。

平和に対する願い

西台中学校 2年 星 有綾

『いちばん悲しかったのは、家に帰ったときに両親がいないことでした。』

笠岡さんは、そう語ってくれました。

「ただいま。」といっても、「お帰り。」と言ってくれる人はいないのです。私はそうなることを考えたこともありませんし、家には必ず誰かがいて、それが当たり前になっています。きっと私と同じような人は他にも大勢いると思います。そして笠岡さんもそうだったのではないかと思います。

たった一発の原子爆弾は、木も動物も建物も街も、そして家族までも壊してしまっただけです。

笠岡さんのお話を聞いて、勉強したくないと思ってしまう自分や、親に反発してしまう自分がとても小さく思えました。今の私たちの環境があらゆる面で優れていて贅沢だ、ということがよく分かりました。また、笠岡さんのような辛さを体験した方に対しても本当に失礼な行動だということも分かりました。

お話を聞きもうひとつ思ったことがあります。それは「命を大切にする」ということです。今まで「命」というものに対して軽い気持ちで考えていました。しかし笠岡さんのように幼くしてご両親が亡くなられ、毎日のように「命」と向き合っている方がいると知り、それではいけないと強く思いました。「命を大切にしてほしい。」という笠岡さんの願いが感じ取れました。

今の日本の平和はたくさんの人々の努力や苦勞のうえで成り立っている、平和は当たり前ではない、ということを改めて知ることができました。

私は今回の旅で様々なことを学び、感じ、知り、大きく成長することができました。平和があるからこそ私は学ぶことができ、成長することができ、不自由なく生活することができるということを常に胸に刻み、感謝し続けたいです。

71年前、このようなことが起きていたこと、そしてそれを知った私を感じたり、考えたりしたことを一人でも多くの方に伝えられるよう、今後の発表に力を入れ、これからも平和について関心を持ち続けたいと思います。

最後に、このような貴重な経験をさせて下さった皆様に感謝致します。ありがとうございました。



原爆の子の像



平和の時計塔



広島痛みを感じて

中台中学校 2年 曾根原 輝

1945年8月6日午前8時15分。一発の原子爆弾により、多くの命が奪われました。建物は熱線と爆風で破壊され、人の命だけではなく、生き残った人の夢と希望までも奪っていきました。

ヒロシマ青少年平和の集いに参加し、実際に原爆を体験した笠岡貞江さんに、あの日、きのこ雲の下では何が起きていたのか、戦争はどれだけ恐ろしいものなのかをお話していただきました。そのお話の中でとても印象に残っていることがあります。それは原爆が落ちて何日かして帰ってきたお父さんの話です。「全身が焼け焦げ真っ黒で、一目見ただけでは誰だかわからない状態でした。体に触れると黒く焼け焦げたところが剥がれ落ち、真っ赤な生々しい肌が現れました。その傷口にはウジ虫やハエがたかっています。」私はその話を聞き、胸を締め付けられるような気持ちになりました。戦争の残酷さや悲惨さを目の前で語られ、その時の衝撃はとても大きいものでした。

戦争はあつてはならないという思いで参加した平和記念式典には、様々な国や地域から多くの人々が参加していました。世界各地からの関心が広島に寄せられていることに、平和への小さな希望が見えたような気がしました。そして8時15分に黙祷をささげました。黙祷の間、響き渡る鐘の音とともに被爆者の方々の筆舌に尽くしがたい痛みが伝わってきました。灯籠流しでは、一つ一つが亡くなった方の魂のように見えました。

平和記念公園で折り鶴を奉納した後、資料館で原爆の影響を受けた様々なものを見ました。その威力の恐ろしさに身のすくむ思いでした。そんな原子爆弾が今もなお数多く存在していることに大きな不安を感じると同時に、なぜ核兵器を作り続け、世界を脅威にさらす動きが止まらないのか、憤りすら感じました。



私たちは将来の平和を担う世代です。核兵器や戦争が無くなり、誰もが平和に暮らせる日が来るよう、広島で見て、聞いて、感じたことを後世に伝えていく責任を果たそうと決意した貴重な三日間でした。平和の灯が消えることのないよう、この体験を活かし続けていこうと思います。

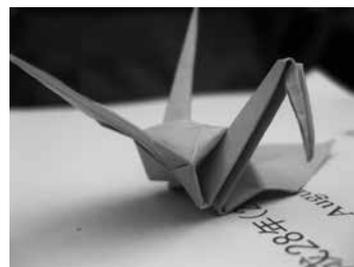
広島平和の旅を終えて

上板橋第一中学校 2年 川崎 光莉

私は原爆投下から71年の月日が流れた年に中学生広島平和の旅に参加し、普段考えることのない戦争について学び、深く考えることができました。

<被爆体験証言を聞いて>

被爆体験について話してくださった笠岡貞江さんは、中学生の時に被爆し、原爆によって家族を失ってしまったそうです。笠岡さんと同じ事がもし自分におきたらと想像すると、とても耐えられません。話を聞いていくと、笠岡さんには家族にしてあげられなかった後悔が沢山ありました。しかし、それらは全て戦争という悲惨な事実が生み出したものです。私は、戦争は原爆で亡くなった方だけではなく、残された家族や友人にさえも体と心に一生消えることのない傷を刻んでしまうのだなと思いました。笠岡さんが言っていた言葉があります。「どうする事も出来ないのが戦争、幸せな家や人の命を奪い、人の心を変え、人を人と扱わない。それが戦争なんだ」と。この言葉に私は衝撃を受け、二度と戦争を起こしてはいけないという気持ちがより一層強くなりました。今回笠岡さんが語ってくださった『戦争』という悲しい事実を、私は一生忘れません。しかし被爆者の方々のお話を聞けるのも、あと何年あるかわからないのです。ですから私は、自分の耳で聞いたこの『戦争』という悲惨な事実を、後世に伝えていくことが必要だと考えます。



<平和記念式典への参加>

平和記念式典は、毎年原爆が投下された8月6日に行われます。71年前のその日、広島に原爆が投下され、何の罪もない夢や希望で満ち溢れた多くの人々が犠牲になったのだと思うと、胸が締め付けられる思いでした。式典には広島市長、子供代表や内閣総理大臣、また国際連合の代表など多くの方々が参列をしました。広島に原爆が落とされた8時15分には、全員で被爆された方々に1分間の黙とうを捧げました。黙とうを捧げている間、過去の戦争という悲惨な出来事を受け止め、これからの未来で“あの日”の過ちを繰り返さないよう、平和の訪れと核兵器の廃絶を願いました。

<平和記念資料館>

広島の中で最も戦争の悲惨さを強く物語っている場所でした。焦げた弁当、人影が残ったままの壁、黒い三輪車などがあり、原爆の恐ろしさを強く訴えてくるものばかりでした。それらを自分の目で見て実感することができ、これを多くの人に伝える責任の重さを感じました。

<旅を終えて>

今回の平和の旅で戦争の悲惨さを実感し、二度と過去の過ちを繰り返さない為に、見て知って学んだことを後世に語り継いでいくと決心しました。核兵器のない平和な未来が訪れるよう自分ができることを考え、それに向かって努力していきたいと思います。

2度と「あの日」を迎えないために

上板橋第二中学校 2年 敷藤 優里

8月6日午前8時15分。その日時を聞いて何人の人に、その時起きたことが分かるだろうか。

71年前のその日、広島町の町が一瞬にして破壊された。そして、人々も体と心に大きな傷を負った。ある人はひどく火傷を負い、またある人は後遺症に悩まされた。

それも、たった1つの原子爆弾によって。



【被爆者笠岡さんのお話】

私が広島平和の旅で印象に残ったのは、被爆者の笠岡さんのお話だ。笠岡さんは当時、高等女学校の1年生。年齢は12歳だった。8月6日その日は、両親が外出していて祖母と2人でお留守番をしていた。8時15分、窓から強い光が注いだ。頭からは血が流れたという。笠岡さんは何が起こったのかわからなかった。でも、近所のおじさんが帰ってきたとき、やっと何が起こったか分かったという。

父がいる所へ迎えに行った時、全身に火傷をしていて本当に自分の父なのか分からなかったという。父が母を探してくれと言った時、やっとお父さんだと分かったという。父は、水を欲しがっていたが、火傷をしている時はあげてはいけないと聞いたのであげたくてもあげられなかった。父の体にはハエが飛んできたという。

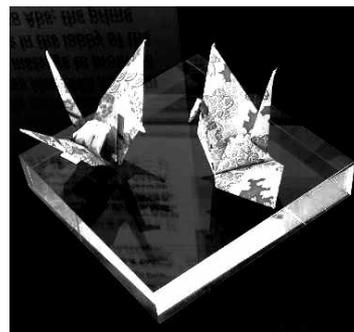
そして父は何日かして死んだ。そのことを笠岡さんは強く後悔しているそうだ。私は、笠岡さんの気持ちがとてもよく分かった。数日後母を探しに行ったとき、母の名前が書いたお骨が見つかったそうだ。笠岡さんによると母は父と離れ子どもをいち早く救うために川を泳いでいる時に兵隊に捕まったそうだ。

私は自分の命よりも子供たちの命を優先にするのは今と同じだなと思い、とても感動した。

【最後に】

戦争は人の命を奪い、善の心までを奪った。被爆者の年齢は今や平均年齢81歳にまでなっている。今後、生の声で体験談を聴くことは難しくなるだろう。これからは、私たちが戦争のことについてよく学び、次の世代に戦争の恐ろしさや悲惨さを伝えなければならない。

決してあの恐ろしさを忘れてはならない。そう、“ノーモアヒロシマ・ノーモア ナガサキ”を実現するために。



平和のバトンを繋ぐ

上板橋第三中学校 2年 石黒 遥

今から71年前の出来事を後世に継承していくには、また風化させないようにするには私達は何をすべきでしょうか。戦争を体験していない私がどのような立場で継承していかなければならないのでしょうか。

1945年8月6日午前8時15分。たった1発の原子爆弾「リトルボーイ」が多くの人々の命・日常を奪っていきました。原子爆弾からは高濃度の放射線が放出、爆風や熱線により緑豊かだった広島は一瞬にして廃墟と化しました。あの大きなキノコ雲の下で何が起こったのか。語り部の笠岡さんは涙を浮かべながら話をして下さいました。笠岡さんは12歳の時に自宅で被爆しました。爆風でガラス窓が吹き飛び、その一部は体中に刺さりましたが不思議と痛みは感じなかったそうです。お父さんと弟は見つかりましたが、お母さんに会えることはありませんでした。その2日後にお父さんは亡くなりました。助かる見込みが無いから「井戸に行ったけれど、水が汲めなかった。」と嘘を言って水をあげられなかったことが71年たった今でも心残りだそうです。笠岡さんは最後にこのようなことを仰っていました。



「死にたくて死んだ人は1人もいない。生きてたくても生きられなかった。生きている間に多くの人に自分の体験談を話す。それが私の使命だと思う。」

私はこの言葉に強い衝撃を受けました。また、戦争体験者から直接話を聞ける最後の世代として出来ることは何だろうと改めて考えさせられました。

毎年8月6日に行われる広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式の中で小学校6年生の児童たちが「誰が、平和な世界にするのでしょうか。夢や希望にあふれた未来は、ぼくたち、わたしたち一人一人が創るのです。」と仰っていました。平和は空から降ってくるものでも、転がっているものでもありません。人間の努力と戦争をしてはいけないという強い気持ちによって初めて実現するものだと私も思います。

これが冒頭の答えではないでしょうか。また、正しい平和の創り方も後世や世界に発信していくことも大切なことです。人間が核兵器を作ったならば人間が核兵器を廃絶させる責任があります。人間が戦争を終わらせなければ、戦争が人間を終わらせてしまうかもしれません。



そんな悲惨な出来事を繰り返さないように私達の手で、言葉で平和な世界を創っていきましょう。

最後になりますが、この旅に行くにあたってお世話になった先生方、板橋区職員の皆様、広島の関係者の皆様、貴重な体験をさせていただき本当にありがとうございました。

非核の世の中へ

桜川中学校 2年 小川 凜

「平和とは何だろうか。」

そんな疑問を抱きながら、今回の板橋区広島平和の旅へ参加しました。原子爆弾「リトルボーイ」を落とされ、いつもの当たり前前の生活が一瞬にして奪われた1945年8月6日8時15分。それを体験した笠岡貞江さんからのお話は生々しいものでした。高等女学校1年生だった12歳のとき、笠岡さんは爆心地から3.5km離れた家で被爆しました。笠岡さんは話の中で「生きてくても生きられない」と語っていました。今の私たちは、生きたいという意識が低く、当たり前という感覚のほうが大きいです。しかし、戦時中では**生きたい**という強い気持ちがないと物資が少なく十分な生活が難しい中、耐え抜くことは困難でした。そのように考えると、今の生活は平和だと改めて感じます。被爆者の笠岡さんの話を聞いて今の生活が当たり前ではなかったことに気付かされ、改めて日常生活を感謝することができました。

また、8月6日に行われた平和記念式典ではこども代表の平和への誓いに心を打たれました。こども代表の訴えかける言葉は私の世代からの目線であり、私に平和に対する強い意志を芽生えさせました。



「私たちは、待っているだけではいけないのです。」こども代表の平和への誓いで言っていた言葉です。この言葉には、待つのではなく自分から行動を起こすことの必要性を訴えています。戦争の悲劇や原爆の恐ろしさが時間と共に薄れている今、私達の世代が、年々減少している被爆者の話に耳を傾け、原爆・戦争について日本へ、そして世界へ非核を訴え平和な世の中に近づくように協力をする必要があります。

私の今できることは、この広島平和の旅で体験し、学んだことをより多くの人に伝えることです。この旅に行く前に抱いていた「平和」の答えはきちんとは出ませんでした。平和についての自分自身の考えがより深まったと思います。

最後になりましたが、今回の平和の旅に行くに当たって引率して下さった教職員の方々、学校の先生、板橋区の方々、そして携わって下さったすべての方々、本当にありがとうございました。

平和とは

向原中学校 2年 和氣 野乃佳

1945年、8月6日。あの日、広島に原爆が投下されてから、今年で71年が経ちます。私はこの旅を通し、「平和」について深く考えさせられました。

初日に参加した「ヒロシマ青少年平和の集い」では、12歳の時に被爆された笠岡貞江さんのお話を聞きました。笠岡さんはとても明るい素敵な方でした。当時は勉強もできず、上級生は工場などで働いていたそうです。働いていたおよそ2万7600人のうち、7000人もの子供達が亡くなったと聞きました。

「私達も、小さい時には皆さんと同じように夢があったんですよ。」と笠岡さんは話します。友達と絵本を見ながら、「これより綺麗な花嫁になるの!」そう話をしていたそうです。その一緒に夢を語った友達が、皆亡くなっていったのです。どんなに辛いでしょう。私は、思わず涙が出てきました。被爆された方のお話を直接聞く事ができるのは、私達の世代で最後だともいわれているなか、本当に貴重な体験をさせていただきました。私達は、笠岡さんがお話してくださったことを、「知った責任」として次の世代に伝えていきます。

2日目の夜は、灯籠流しをしました。灯籠は綺麗でしたが、それ以上にとても嬉しかったのが、外国の方がたくさんいた事です。まずは「興味を持つ」という事が平和に繋がっていくのではないのでしょうか。これからもっと外国から被爆地に訪れる人が増え、興味を持つ人が増えていくと良いと思います。

3日目には、平和記念資料館を訪れました。午前8時15分で止まった時計、焼けてちぎれた制服、真っ黒に焦げた弁当箱・・・そこにある数々の展示物が原爆の恐ろしさを物語っていました。その中で私が特に衝撃を受けたのは「中学生の残したツメと皮ふ」です。当時県立広島第二中学校1年生だった手島範明さんは、建物疎開作業現場で被爆し、全身の皮ふがたれ下がるほどの大火傷を負いました。その時、喉の渇きに耐えかねてか、ツメのはがれた指先から出るウミを吸ったそうです。そのツメと皮ふの展示物はあまりに生々しく、私は思わず目をそらしてしまいました。しかしこれは71年前、本当に起こった事なのです。しっかりと向き合い考えていかなければならないと、改めて感じました。

今回の広島平和の旅を終え、私は「平和」とは「愛」なのではないかと思いました。周りの人に、国に、地球に。愛をもてば必ず世界は平和になるはずです。この地球が愛で溢れる時、それが本当の世界平和だと思います。

最後に、板橋区役所の皆様、先生方、たくさんの貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました。

広島平和の旅に参加して

赤塚第一中学校 2年 福井 桜愛

今年の8月6日で、広島に原爆が投下されてから71年という時を刻むことになりました。この71年という長い年月が経ち、広島は美しく平和な街に復興しました。辛うじて生き延びた人々も放射線により、今もなお苦しみ続けています。そして被爆者の方の話が直接聞けなくなる日が近づいています。だからこそ今私達にできることは、現地に行き原爆の恐ろしさを学ぶことだと思います。そしてその実態を一人でも多くの人に伝えることが私達の役目だと思います。

平和記念式典。午前8時15分、黙祷。この一分間はとても長く感じました。原子爆弾の犠牲となられた御霊に対し祈りを捧げ、71年間の思いが伝わってきた気がしました。

私が特に胸を打たれたのは、子供代表の平和への誓いです。「平和な世界を創るのは私達です。」と語っていました。私は戦争について学ぶとき、いつも思うことがあります。どうして何も残らない「絶対悪」を続けたのだろうか。誰も幸せにならない。笑顔が消える世界になぜしたのか。多くの人々へ語り伝えていくということを改めて感じさせられたスピーチに思わず鳥肌が立ちました。

そして辛い日々を乗り越え、原爆の恐ろしさをずっと伝え続けている被爆者の方のお話を聞くことができました。あまりにも過酷な実態に涙が出ました。この方はその当時、私達と同じ中学生だったそうです。勉強ができない。家族と離ればなれ。お腹がすいた。戦争とは人と人が殺し合う。にもかかわらず日本は戦争を始めた。戦争で罪のない人々の命が奪われ、友達、家族を失ったことはいつまでも絶対に許さない。しかしここまで生きてこられたことに幸せを感じていると、語ってくださいました。

今の私達がどれほど幸せで、当たり前な事がどれほど有り難いことなのか。

家に帰って「ただいま」「お帰り」の会話ができること。学校に行って勉強ができ、友達と笑顔で話せること。その当たり前な事が当たり前になりすぎており、もう一度考え直さなくてはならないと思いました。

5月27日にアメリカ合衆国オバマ大統領が広島を訪問した際に作った折り鶴や、原爆の被害を受けた建物の中でも特に有名な原爆ドームを見ることができました。71年前この近くで原爆が投下されたと思うと、とても恐ろしかったです。

また、夜の灯籠流しでは、灯籠に「核兵器を確実になくす この日本に永遠の smile を」と書きました。たくさんの方々の願いと共に未来に届くことを願います。

最後に、この広島平和の旅を通して原爆の悲惨さはもちろんのこと、当たり前な事がどれほど有り難いことなのかということを知ることができました。

今回学んだことを一人でも多くの方に伝えていきたいと思う旅になりました。

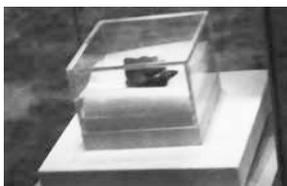
共に生きる ～敵じゃない、仲間だ～

赤塚第二中学校 2年 岡村 萌里

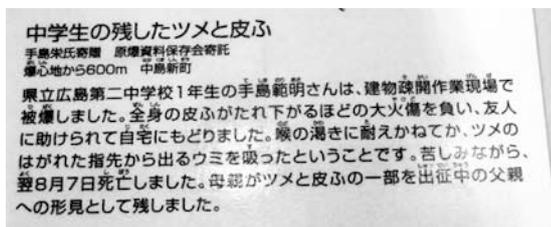
この題名は、広島平和の旅に参加して、私が一番感じた言葉です。

私は三日間、とても貴重な体験をさせていただきました。被爆者の方からお話を聞いたり、同じ年代の人達と平和について考えたり、式典に参加したり。ひとつひとつが私にとって、平和について考えるととてもいい機会になりました。

その中でも1つだけ、特に皆さんに伝えたいことがあります。それは、「物」が「物語」へ変わったときのこみ上げてくる気持ちや決意と、人と出会うことによって得られる新しい知識と広い価値観です。原爆資料館での話です。原爆資料館にあるのは確かに「物」ですが、その物には必ず「物語」があります。この写真を見てください。



これは、「中学生の残したツメと皮ふ」です。「物」だけを見ると、「うわ、残酷。」としか思わないかもしれません。それでは、「物語」を見てみてください。



いかがでしょう？少し踏み込んで「物語」を見ると「物」に感情が入り他人事ではなくなります。物の裏側まで見る事が出来ます。

そう考えると、この戦争も歴史上の一つの事件なのかもしれません。しかしたった一つの事件の中には、被害にあった方々、その親族や仲間の方々、原爆を使用したアメリカの方々と、何億の物語があるのだと考えます。

ではそんな痛みと悲しみだけを残した残酷で悲惨な戦争を、もう二度と起こさないために何が出来てしまうのでしょうか。中学生の私達でも出来るのでしょうか。私は世界中に友達を作ることだと思います。友達の家の上に爆弾は落とせません。お互いわかりあうために、言語の習得努力も必要です。伝統や文化を受け入れ各国の個性を認める広い心と、相手の立場に立って物事が見られる想像力が必要です。爆弾は大きな戦争の象徴だけれど、それ以外にも読むもの、音楽、趣味、思想、勉強と、色々な物が制限され、言いたいことも言えず、やりたいこともできない。それが戦争だと思います。情報や噂などを鵜呑みにせず、本当かどうか、自分の目で見て、自分の頭で考え判断することがこれからますます大切になっていくと思います。敵を作るのではなく仲間を理解するために。奪い合うのではなく、世界が協力し合って高め合う。共に力を合わせて生きていく。そんな世界を、私達は目指します。

最後になりますが、私にこのような貴重な体験をさせて下さった関係者の皆さん、そして平和の旅を通して出会った大切な仲間たち、本当にありがとうございました。この経験を、これから一人でも多くの人達に伝えていきたいと思っています。それが私達の使命です。

未来にむけた平和のために…



赤塚第三中学校 2年 杉山愛香音

「平和って何なのだろう？」戦争を体験していない私達は、そのようなことすら考えずこれまで生活をしてきました。この平和について気づき、そして平和を未来につなぐためにはどうすればいいのか、自分なりに考えるための旅が今回の広島平和の旅でした。広島では、戦争の結果生み出された原爆という兵器の恐ろしさ、落とされた当時の広島の悲惨さ、残酷さなど、はじめに想像していた以上のものを知ることになりました。

〈ヒロシマ青少年平和の集い〉

ここでは、被爆体験者の笠岡貞江さんからのお話がありました。笠岡さんは12歳のときに被爆され、本当につらい経験を目に涙を浮かべながら話していました。その後「今、笠岡さんは幸せですか？」という質問が出されたのに対し、笠岡さんは「はい。幸せですよ。」とすぐに明るく答えていました。被爆の体験が、沢山の困難を乗り越える強さだと感じました。また、笠岡さんが思われる平和とは「人として相手を思いやる心をもてる状態」だそうです。戦時中は自分を守ることが精一杯だったので、「心が心でない」と表現されているところが大変印象的でした。自分の心が本来の心のままでいられること、それが平和である、ということを知りました。

〈資料館・平和記念公園の見学〉

資料館では、当時の悲惨さをひしひしと想像させるような遺品や模型や、写真などが数多く展示されていました。人間が人間ではないような姿で写っている写真が目飛び込んできて、思わず目をそらしてしまいました。平和の集いで笠岡さんは「戦時中は人の心が心でない」とおっしゃっていました。しかしそのような残酷な状況においても、黒焦げた人が小さな子供を抱いて、片足で立っていて逃げるような姿勢で亡くなっていた状況が絵として残されていました。とても悲しい絵です。また、原爆地獄の中でも人間性を失うことがなかった人たちの気高さを示す「原爆犠牲国民学校教師と子どもの碑」というものが平和記念公園にはあります。自分の心をなくさずに人を思いやれる勇敢な人がいたと聞いて感動する一方、既に原爆によって亡くなってしまったと思うと複雑な気持ちです。

〈最後に〉

私は今回の広島平和の旅を機に、未来の平和のために、自分がやらなくてはいけないことが見つかりました。それは過去の戦争という真実と向き合い、見極め、知るということ。そして被爆体験者の笠岡さんもおっしゃっていたとおり、過去にあった戦争、そして今回の訪問で学んだ広島等で起きたことを周囲そして後世へ伝えることです。これら2つのことを実行し、積極的に平和に貢献していきます。

平和とはなにか

高島第一中学校 2年 北川 杏

私は広島平和の旅に参加して、テレビや教科書を見るだけではわからないことを学んできました。

それまでの私は**平和**とはなにか、その平和はどのようにして創っていくのか、ということを日常生活で考えたことはありませんでした。ですが、今回実際に原爆を体験した方のお話を聞いたり、平和記念式典に参加したことを通して、家に帰ったら誰かがいて「おかえり」と声をかけてくれる人がいて、あたりまえのように勉強して、あたりまえのように友達と遊ぶ。そんな「**あたりまえ**」なことが平和なんだ、と思いました。

実際に原爆の被害にあった笠岡貞江さんのお話の中で、「原爆が落とされる前までは、幸せに暮らしていた。子どもにも夢があった。原爆が落とされ、両親がいなくなってしまった家に帰っても、「おかえり」と言ってくれる人がいなくて悲しかった。」という言葉がありました。私は普段、家に帰れば親が「おかえり」とあたりまえのように言ってくれます。そんな「あたりまえ」のことも一瞬で奪ってしまうのが原爆なのです。子どもたちの夢も、希望も、未来も一瞬で奪ってしまうのが原爆だと知りました。

平和記念式典の日は、71年前と同じように、青く晴れ渡った空でした。平和記念公園に行くまで、本当にこの地に原爆が落とされ、何十万人もの尊い命が失われた場所だという実感がわきませんでした。平和記念式典の会場には海外の人もたくさんおり、日本以外にもこんなにたくさんの方が来るのか、と驚きました。

会場では、市内の中学校、高校の吹奏楽部が「祈りの曲」というものを演奏していました。私は祈りの曲を初めて聞きましたが、なんだかすごくおどろおどろしくて怖いと感じました。この曲を聞いて、本当にこの場所に原爆が落とされて沢山の命が失われたんだと実感し、とても怖かっただろうなと思いました。

戦後71年をむかえた今、平和とはなにか、その平和をどのようにして創っていくのか、ということを改めて考えるべきです。あたりまえのことがあたりまえでなくなる怖さを想像することが大事だと思います。原爆が落ちたときの本当の怖さなんて私達は体験していないからわかりません。しかし、考えること、想像することはできます。きっと怖かっただろうな、辛かっただろう、私だったら耐えられないだろうな、と考えることが必要だと思います。今回の平和の旅を通して、考えること、想像することが大事だと思うと共に、原爆について私たちが後世に語り継いでいくことが今私たちにできることの一つだと思います。

世界の平和は人類の願い

高島第二中学校 2年 小野 初花

七十一年前の八月六日、八時十五分。

花も、草も、木も、人も、全て焼き尽くされました。

初日のヒロシマ青少年平和の集いでは、被爆者の方の体験談を聞かせていただきました。当時十二歳、現在八十三歳の笠岡貞江さんは笑顔でマイクを握り、まず自分の年齢やなぜこういった場所で体験を伝えているのか話してくださいました。その時の笠岡さんはとても戦争を体験した人とは思えないほどにこやかでした。

しかし本題にはいったとたん、笠岡さんの表情は別人のように陰しくなりました。

「戦争は、人と人とを殺し合う！！」

心底戦争を憎んでいる、シンプルで説得力のある言葉でした。それは今でも私の心に深く突き刺さっています。どこかで聞いたようなありふれたフレーズですが、戦争の現実を自分の目で見た人の言葉はこうも重みがあるのかと身にしみて感じました。

笠岡さんは、原爆で両親を亡くした事、お父さんが真っ黒に焦げていて誰なのか解らなかつた事などを話しました。笠岡さんのお父さんは死の間際に水が欲しいと何度も何度も言ったそうです。しかし飲めるような水などどこにもなく、「結局最後まで水を飲ませてやれなかつた……」と自分を責めるように言う笠岡さんのあの何とも言えない声色と表情が忘れられません。『命を救ってやれなかつた』ではなく『水を飲ませてやれなかつた』という表現が当時の当たり前の事ができない状況を物語っているようで、とても切ない気持ちになりました。

平和記念資料館ではたくさんの資料を見ることができましたが、中でも一番印象的だったのが、人差し指の第一関節から上の爪がついたまま、まるで脱皮したかのようにはがれた皮膚でした。心臓が変な音をたてました。慌てて説明書きを見ると、端に「レプリカ」と記載されていましたが、「喉の渇きに耐えかねて自身の指先から出るウミを吸った」という言葉に激しく動揺して、思わずそっと自分の指に触れました。それ程までに喉が渇いていたのかと思うと切ない気持ちでいっぱいになり、自分のリュックに入っていた未開封のペットボトルを平和記念公園にお供えして帰りました。

私は広島に行った事で原爆の現実を知る事ができました。正直、私は原爆の威力を甘く見ていたように思います。しかし被爆者の方の生々しいお話や、目を覆いたくなるような写真、原爆の被害を物語る展示物などから、どれだけ原爆が残酷で非人道的な物かを知ることができました。私には些細な事しか出来ないけれど、核兵器の無い平和な世界を実現するために、少しでも広島の地で学んだ事を伝えていきたいと思いました。

平和な世界に

高島第三中学校 2年 久保田 璃子

二泊三日の広島平和に旅に参加して、私は「あの日の出来事を決して風化させてはいけない」と責任を感じました。そして、大切な人たちと当たり前の生活を出来ることがどれだけ幸せで大切なのか、改めて実感しました。

【被爆体験講話】

一番印象に残っているのは、原爆被害で両親を失い、家に帰り「ただいま」と言っても「おかえり」と返ってこなかったのが辛かった、というお話でした。今の私たちの生活はどうでしょうか。「ただいま」と言えば「おかえり」と返してくれる家族がいます。一瞬で家族を失うのです。想像しただけでも怖くてたまりませんでした。当たり前だった生活が当たり前でなくなってしまうのです。

【平和記念式典】

この式典は、日本人の方以外にも多くの外国人の方が参列されていました。世界中の人々が核兵器はゼロにしないといけないと考えているのだと思いました。

黙祷の一分間は、今までに感じたことのない、とても長く重いような一分間でした。七十一年前、一瞬のうちに十四万人もの尊い命が失われたと考えると、改めて原爆は恐ろしいものだと感じました。

平和の誓いで「私たちは待っているだけではないのです。」という言葉に、私は心を動かされました。今、一人一人が行動を起こし、次の世代へ語り継がなければいけないのです。

【平和記念資料館】

そこに展示されているものは、目を疑うものばかりでした。八時十五分で止まった時計や原爆の被害でボロボロになってしまった服。焼け焦げた三輪車。それらの物からは人々の苦しみや怒り、生きることへの絶望感を感じました。私は戦争に改めて恐怖を感じました。

【感想】

広島に行くまで、戦争がもたらした悲劇や、原爆の恐ろしさを理解出来ていると思っていました。実際に広島に行くと、言葉では表現出来ない衝撃を受けました。広島での出来事を知ったことを後世に伝えていく責任があると思うのです。この貴重な経験をさせて頂いたことに感謝し、戦争の恐ろしさを多くの人へ伝えていこうと心に誓いました。

第2部

第6回 中学生長崎平和の旅



平和祈念像前にて

参加生徒

板橋第一中学校	関 吾倫	志村第四中学校	石田 泰造	向原中学校	野々村尚槻
板橋第二中学校	伊藤まどか	志村第五中学校	中西 環	赤塚第一中学校	足立 大祐
板橋第三中学校	河原木悠貴	西台中学校	岡村 美喜	赤塚第二中学校	石井 朋花
板橋第五中学校	村瀬 諒治	中台中学校	田中 さえ	赤塚第三中学校	佐藤向日葵
加賀中学校	保城 亜衣	上板橋第一中学校	中尾 友美	高島第一中学校	工藤 詩織
志村第一中学校	高橋 はな	上板橋第二中学校	伊藤杏華里	高島第二中学校	村上かりん
志村第二中学校	伊藤 潮里	上板橋第三中学校	金田 菜楠	高島第三中学校	内田 実咲
志村第三中学校	池田 優和	桜川中学校	中村陽菜子		

引率者

赤塚第三中学校	須田 淳一校長(団長)	後藤 潤教諭(指導員)	齊藤 智恵子教諭(指導員)
---------	-------------	-------------	---------------

中学生長崎平和の旅 行程表

実施期間 平成28年8月8日～10日（2泊3日）

8月8日(月)

時 間	行 動 内 容
7:15	板橋区役所集合・出発式
7:30	板橋区役所 発
8:50	羽田空港 着
10:00	羽田空港 発
12:00	長崎空港 発(観光バスで平和公園へ)
13:00	平和公園 着
13:40	★青少年ピースフォーラム受付
14:00～17:00	★開会行事(被爆体験講話) ★被爆建造物等のフィールドワーク(浦上天主堂コース)
17:10	平和公園 発
18:00	ホテル 着
19:30	夕食
22:00	就寝

8月9日(火)

時 間	行 動 内 容
6:00	起床
7:00	朝食
8:00	ホテル 発
9:00	平和公園 着
10:40～11:45	平和祈念式典参列
12:30	昼食
13:30～15:40	観光
16:30	ホテル 着
18:00～19:25	学習会
19:30	夕食
22:00	就寝

8月10日(水)

時 間	行 動 内 容
6:00	起床
7:00	朝食
8:40	ホテル 発
9:30	原爆落下中心地 着(献花)
10:00～12:00	長崎原爆資料館・追悼平和祈念館見学
12:10	原爆資料館発
12:30	昼食
14:00	長崎空港 着
15:10	長崎空港 発
17:00	羽田空港 着
18:40	羽田空港 発
18:50	板橋区役所 着・解散式

★は青少年ピースフォーラム事業(長崎市主催)

『チーム板橋 長崎平和の旅』を終えて

第6回中学生長崎平和の旅
団 長 須 田 淳 一
(赤塚第三中学校長)

まずもって、毎年「広島・長崎平和の旅」の機会を、『チーム板橋』こと板橋区立中学校2年生46名にいただき、板橋区長 坂本 健 様をはじめ多くの関係諸機関の皆様方に、心より感謝申し上げます。ありがとうございます。

さて、私は平和祈念式典で田上長崎市長が述べた「長崎平和宣言」の中の、次の言葉が今でも強く印象に残っています。

『核兵器は人間を壊し続ける残酷な兵器なのです。今年5月、アメリカの現職大統領として初めて、オバマ大統領が被爆地・広島を訪問しました。大統領は、その行動によって、自分の目と、耳と、心で感じることの大切さを世界に示しました。核兵器保有国をはじめとする各国のリーダーの皆さん、そして世界中の皆さん。長崎や広島に来てください。原子雲の下で人間に何が起きたのかを知ってください。事実を知ること、それこそが核兵器のない未来を考えるスタートラインです。(中略)

若い世代の皆さん、あなたたちが当たり前と感じる日常、例えば、お母さんのやさしい手、お父さんの温かいまなざし、友だちとの会話、好きな人の笑顔……。そのすべてを奪い去ってしまうのが戦争です。戦争体験、被爆者の体験に、ぜひ一度耳を傾けてみてください。つらい経験を語ることは苦しいことです。それでも語ってくれるのは、未来の人たちを守りたいからだと知ってください。(後略)』

「長崎平和の旅」が終わり、『チーム板橋』23名の感想文を読みました。一人一人が事前学習で学び切れなかった長崎での現実を、真摯に受け止め、学び、感じたことが素直に綴られており、私は大変感銘を受けました。8月9日の「平和祈念式典」、「被爆体験講話会(青少年ピースフォーラム)」、「原爆資料館」など、足を運び、目で見て、耳で聞いて、心で感じ、頭で考え、長崎の風を肌で感じ、「戦争の悲惨さ・平和の尊さ」を改めて考える中から、平和に対する意識が目の動きや顔の表情に表れ高まったと私は感じました。

結びに、私は今、『チーム板橋』23名との出会いで、新たな楽しみが増えました。それは、今回の『チーム板橋』23名の中から、将来板橋区役所の職員として、また、東京都の教員として板橋区に配属され、「広島・長崎平和の旅」引率の御縁をいただける生徒が出たらうれしいなと思います。

板橋区役所総務課のお二人はもちろんのこと、『チーム板橋 長崎平和の旅』に関わってくださった皆様方のお力添えのおかげさまで、団長という大役を無事終えられたことに、改めまして御礼申し上げます。ありがとうございました。

未来を考えるスタートライン

板橋第一中学校 2年 関 吾倫

「長崎や広島に来てください。原子雲の下で人間に何が起きたのかを知ってください。事実を知ること、これこそが核兵器のない未来を考えるスタートラインです。」

これは平和祈念式典での田上富久長崎市長の長崎平和宣言の中の言葉です。この言葉は、僕の平和の旅の中で強く心に突き刺さり、旅を終えた今も僕の頭に何度も浮かんできます。なぜならこの平和の旅が、僕の「スタートライン」になったからです。

平和の旅に参加する前、僕にとって戦争は、ただ教科書の中のできごとでした。しかしこの平和の旅で、自分の目で見て、自分の耳で聞いて、感じて、考えることで、初めて戦争が身近になった気がしました。

原爆資料館では、自分の想像をはるかに超える悲惨な写真や資料をたくさん見ました。そこには、「すさまじい熱線・すさまじい爆風」という説明文が付いていましたが、原爆の威力は、そんな表現ではとても追いつかないと感じました。言葉では表現できないほどのものすごい威力を目の当たりにして、僕はただただ怖くなり、足がすくみました。

被爆体験講話、語り部の永野悦子さんのお話は、あまりにも辛いお話でした。聞いていて心臓をつかまれたように悲しく、苦しくなりました。永野さんと同じように辛い体験をされた方が何万人もいらっしゃるかと思うと、ずっしりと心が重くなりました。

僕は、こんなに残酷な兵器は、絶対にこの世に存在してはならない、と強く思いました。しかし今、世界には核兵器が、1万5700発もあるのです。僕は核兵器がこんなにたくさん世界中にあることにとても驚き、そしてそのことを今まで知らずにいたことを怖いことだと思いました。

この旅で僕は、「知る」ことがとても大事であることに気付かされました。

ナガサキで何が起こったか知ることによって原爆の恐ろしさを知り、原爆の恐ろしさを知ることによって今ある平和が当たり前ではないことが分かりました。同じように、世界中の多くの人に、ヒロシマやナガサキで何が起こったか深く知ってもらえれば、核兵器はこの世からなくすることができるのではないかと思います。そして、人と人とがもっと深く知り合えば、文化や考え方の違いを乗り越え、戦争のない未来を作っていけると思います。

僕は今、戦争や核兵器のない未来を考えるスタートラインに立ち、歩き始めました。僕ができること、それは平和の旅で知ったことを少しでも多くの人に知ってもらうことです。まずは身近な人にこの経験を伝え、自分なりに「平和」を守る努力をしていきたいと思えます。

長崎の声

板橋第二中学校 2年 伊藤 まどか

初めて戦争について学んだ小学生の時、私は感じたことを言葉にできませんでした。中学生になった今なら伝えることができると思い、平和の旅に参加しました。

被爆体験講話

被爆体験の語り部、永野悦子さんは、疎開先から無理矢理連れて帰った妹、弟を原爆で失いました。自分の責任だと追い込み、自殺まで考えたといいます。しかし、斑点も出ず、髪も抜けずに生きている自分には使命があると悟り、被爆者の思いを伝えようと決意しました。まずは隣の人と仲良くし、その輪を広げていくことが大切だと、力強く語っておられました。この時代に生きる私たちにも、ここで聞いたことを日本へ、そして世界へ発信するべき使命があるのではないのでしょうか。

フィールドワーク

爆心地付近を案内して下さったピースボランティアの方は、被爆後の長崎の写真を指さし、こうおっしゃいました。

「街自体が死んだ。」

人も動物も木も川も、写し出された長崎の全てが、悲しい色をしていました。復興を急いだ長崎は被爆建造物が少ないため、今ある資料を守る取り組みがされているそうです。私は、原爆の威力を語り、あの日を思い起こさせるものが、今後世界が「被爆者のいない時代」を迎えたとき重要になることに気付きました。



平和祈念式典

平和祈念像のふもと、色とりどりの千羽鶴に囲まれ、人々の強く平和を願う声が響いていました。なかでも、あの日を生きた被爆者たちの歌声は、力が籠もっており、71年間の苦痛や哀しみまでが胸を打つようでした。今も地球に1万5千発以上もの核兵器が存在しているという事実を前に、私は、核保有国の人々に長崎を訪れてほしい、この声に耳を傾けてほしいと強く思いました。母国が産み出す兵器が呼ぶ悲劇、そして、被爆地長崎の願いがきっと分かるはずです。

私が三日間を通して見てきた、人々の平和への思いというのは、想像以上に強く、広い世界に訴えるものでした。この声を長崎にとどめてはなりません。私たちの世代で絶やしてはいけません。平和都市板橋区の代表として学んできたことを、大人はもちろん、同世代や後輩たちにもしっかりと伝えていきます。

引率して下さった先生・職員の方々、板橋区役所の皆様、長崎の関係者の方々、ありがとうございました。この旅に参加して本当に良かったです。

平和を守るために

板橋第三中学校 2年 河原木 悠貴

長崎に落とされた原爆でどれくらいの方が亡くられたか知っていますか。犠牲者約7万4000人、負傷者約7万5000人です。僕たちはこの悲劇を未来へ伝えていかななくてはならないのです。

<被爆体験講話>

1日目に青少年ピースフォーラムの被爆体験講話で当時16歳で被爆した永野悦子さんにお話を伺いました。町は焼け野原になっており、死体のごろごろ転がっていたそうです。また知らない人を10人ずつぐらい焼かなくてははいけなかったそうです。僕もあと2年で16歳ですが、その年で死んだ人を焼かなくてはならないなんて、とても残酷だと思いました。そして最後に永野さんは「戦争のないこの平和を皆さんの手で守ってほしい」と仰っていました。僕もこんな惨い戦争を起こしてはならないと思いました。

<長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典>

2日目は平和祈念式典に参加しました。祈念式典には多くの方が参列していました。黙とうでは会場から音が消え、全員が1つになった気がしました。長崎平和宣言の後には平和の象徴である白いハトが一斉に放たれ、感銘を受けました。長崎市長をはじめ多くの方々の話を聞き、改めて戦争の残酷さと平和の大切さについて考える事が出来ました。

<長崎原爆資料館・追悼平和祈念館>

3日目は原爆資料館・追悼平和祈念館に行きました。原爆についての資料・模型・写真など様々なものが展示されていました。変形したガラス瓶、焼けただれた皮膚の写真など、実際に見るととても惨く心が痛みました。

<長崎平和の旅を終えて>

3日間という短い時間でしたが、平和について考え学ぶ事が出来ました。それだけでなくみんなと過ごした生活の中からも学ぶ事が出来ました。原爆はとても残酷な兵器です。しかし年月が経つにつれ被爆体験者も少なくなり、人ごとのように思っている人も多いのではないのでしょうか。だからこそ今回学んできたことをより多くの人に、僕たちが伝えていかななくてはいけないと思っています。引率して下さった皆様本当にありがとうございました。

長崎平和の旅を終えて

板橋第五中学校 2年 村瀬 諒治

1945年8月9日長崎に原爆が投下されました。その被害は僕の想像を絶する程の悲惨さでした。

<被爆体験講話会>

被爆体験講話会では、永野悦子さんからお話を伺いました。被爆された時永野さんは16歳だったそうです。永野さんの弟は火傷で、妹は原爆症で亡くなりました。話の途中で永野さんは「戦争は悲しい別れになる。」とおっしゃっていました。

僕は原爆が想像していた以上に恐ろしいものだと思いました。そしてもしも自分がこのような目にあったら、とても怖いと感じました。

<平和祈念式典>

二日目には平和祈念式典に参加しました。長崎市長の田上富久さんの長崎平和宣言や、被爆者代表の井原さんの平和への誓い、被爆者や児童による合唱などが行われました。

長崎平和宣言の中で「原子雲の下で人間に何が起きたのかを知ってください。事実を知ること、それこそが核兵器のない未来を考えるスタートラインです。」とおっしゃっていました。僕はその通りだと思いました。原爆の悲惨さを知らないと核兵器廃絶を考えられないのではないのでしょうか。ですから多くの人に長崎に来てほしいと思います。

<長崎原爆資料館>

三日目には長崎原爆資料館に行きました。どれも原爆の悲惨さや残酷さがわかる資料でした。

とくに印象に残ったのが、大きな火傷がある写真です。この写真を見た時このようなことが日本であったとは思えませんでした。そしてなぜ長崎の人がこんな苦しい目に遭わないといけないんだと疑問に思いました。

原爆の被害による悲惨さを学び、今自分が普通に生活しているのはとても幸せな事だと感じました。

中学生長崎平和の旅に参加して改めて考えた事は、原爆をなくさない限りは平和は訪れないという事です。この原爆による被害はとても悲惨なものであり、原爆を持っている国が使用しようと思えばまた長崎であった事が起こります。この旅で学んだ事はこれから若い世代に受け継いでいけるよう伝えていきたいと思います。そして一日でも早く原爆をなくしたいと思います。

核兵器のない平和な世界へ

加賀中学校 2年 保城 亜衣

私はこの長崎平和の旅に参加して、戦争の恐ろしさ、平和の尊さ、そして、これからの若い世代がこれらを受け継ぎ、次の世代に伝えていかなければならないことなど、たくさんを学びました。

1日目は、青少年ピースフォーラムに参加しました。最初に被爆者の永野悦子さんの被爆体験をお聞きしました。そのお話は、自分が想像していたものより、はるかに恐ろしく、当時の長崎の惨状がどれほど悲惨であったかを思い知らされるものでした。

その後、現地のボランティアの方々の説明を受けながら、被爆建造物を巡りました。長崎の町は、立ち直っているようにも見えましたが、原爆の被害の爪痕が多く残っていて、すごく心が痛みました。30年もの年月をかけて、レンガを積み立てて造られた浦上天主堂。こんなに丈夫な建物でさえも吹き飛ばしてしまう爆風の威力には言葉を失いました。

2日目は、平和祈念式典に参加しました。式典には、平和を願う多くの人々が参加していました。長崎市長の田上富久さんによる長崎平和宣言では、「被爆から71年がたち、被爆者の平均年齢は80歳を超えました。世界が『被爆者のいない時代』を迎える日が少しずつ近づいています。」という言葉がありました。その言葉を聞いた時、私は今の若い世代が過去の悲劇と向き合うことが必要だと感じました。核兵器の恐ろしさ、命の尊さを日本人はもちろん、世界中の人々に伝えていき、『核兵器のない平和な世界』を現実にしていかなければならないと思いました。

3日目は、原爆資料館に行きました。そこには、長崎に原子爆弾が落とされた時刻の11時2分で止まっている柱時計や、ガラスが溶け、人間の骨と一体化したものなど、今の平和な日常では考えられないようなものがたくさん展示されており、とても衝撃を受けました。

この長崎平和の旅では、実際に長崎に行かなければ分からないような原爆の被害を自分の目で見て学ぶという、非常に貴重な体験をさせて頂きました。戦争や核兵器のない平和な世界を実現するために、一人でも多くの方々に核兵器の恐ろしさを伝え続けていきたいと思います。71年前に起きた悲劇を二度と繰り返してはなりません。



未来へ

志村第一中学校 2年 高橋 はな

1945年8月9日午前11時2分。良く晴れた暑い夏の日。長崎の街は一瞬で変わり果てた姿になってしまった。たった一発の原子爆弾によって。それから71年と少し経った今でもその爪痕は残り続けている。

<1日目>

長崎市主催の青少年ピースフォーラムに参加した。ピースフォーラムでは、被爆体験講話を聴き、フィールドワークを行った。

・被爆体験講話

永野悦子さんの話を聴くことができた。戦争や原爆のことは本やインターネットやテレビで見聞きしたことはあっても、実際に体験した人の話を聴くのは初めてだった。永野さんの話はとても具体的で、あの日の世界が自分の周りに広がっているような感じがした。世界恒久平和に向け小さなことから始めてみようと思った。

・フィールドワーク

長崎の街を歩き原爆の恐ろしさを体感することができた。街のいたるところに原爆の爪痕が残されていた。緑豊かで美しい長崎の街が、被爆したということが信じられなかった。でも、確かに長崎は原爆の恐ろしさを語り掛けている。

<2日目>

平和祈念式典に参加した。思っていたよりも、たくさんの方が参加していて驚いた。それだけたくさんの方が平和を願っているということだろう。また、日本人だけではなく外国人も式典に参加していた。どこにいても皆同じように平和を願っていることが分かった。

<3日目>

長崎原爆資料館と追悼平和祈念館を見学した。資料館は思わず目を閉じたくなるような悲惨な写真が展示してあった。こんな悲惨なことは繰り返してはいけないと改めて認識した。追悼祈念館は、原爆死没者への思いと願いがあふれた場所だった。中でも追悼空間はとても静かで、時間が止まっているようだった。

現在、被爆者の平均年齢が80歳を超え、戦争について知ることが難しくなっている。だから、私たちが後の世代に伝えていかななくてはならない。過去の過ちを繰り返さないために。平和な世界にするために。これからの世界を創っていくのは、私たちだ。

長崎平和の旅を経て学んだこと



志村第二中学校 2年 伊藤 潮里

平和とは？今回の旅に参加する前の私は詳しく答えられなかったであろう。むしろ平和なんてやってこないのではないかと、思っていた。しかし今回の旅で思いは変わった。

71年前の“1945年8月9日午前11時2分”、たった一発の原子爆弾が人々の平凡な日々を一瞬のうちに奪っていった。当時の長崎市の人口は約24万人だったのに対し、そのうちの約7万4千人の方々が亡くなり、約7万5千人の方々が負傷、建物の約36%が全半壊した。そして今年、原爆死没者名簿登録者数は17万2230人となった。

永野さんは被爆体験講話で、雷の何千倍もの光が通り一瞬真っ暗になった、瓦や石が飛び交い窓ガラスは割れ、鉄筋は折れ曲がり、火の海の中、黒い雨の中、あらゆる動物が燃え焦げて黒くなり、まわりに横たわっていた。その衝撃でそのとき目や口は開けられなかった。とおっしゃっていた。また、「一時も原爆が落とされた時のことを忘れたことがない」と哀しげに語っていた。

原子爆弾を含む“核兵器”は人間だけでなく、建物や暮らしなど、まち全体を壊す残酷な兵器である。しかしその現状を知りながらも未だ1万5千発以上の核兵器があり、その核兵器を保有する国がまだたくさんある。最近では新たに「より高性能の核兵器」の企画が進行している。

再び核兵器で同じような被害を出さない為、繰り返さない為にも市民である私たち一人一人、人と関わり、相手を思いやり、言葉、文化、考え方、そして何より人格を理解しあうことが大切だと考えられる。最近では、コミュニケーション力の低下した人々が多く見られる。だが、それは仲良くしようという気持ちを持てば誰でも補えるのではないだろうか。



まず、小さなことから少しずつ進んでいくことが大切で、それがいずれ世界を動かすような大きなことに発展していくのだと思う。人任せではなく、自分自身どうするのか。より平和に触れ、より深く学んでいく為に。

最後になりましたが、私自身の変われる貴重な機会をくださった、板橋区役所の方々をはじめ、先生方、そして両親にも、心から感謝します。本当にありがとうございました。

長崎から平和を…

志村第三中学校 2年 池田 優和

～ 被爆体験者・永野悦子さんの話 ～

その体験談は想像を越える悲惨なものでした。永野さんは、学校で原爆が落とされたときに備えあることを教わっていたそうです。それは「目と耳をいっぺんに抑える」ことです。何のためにかというと、目が飛び出て耳の鼓膜が破れるのを防ぐためです。爆風 爆音にはそれだけの威力があるということです。永野さんは原爆が落とされた瞬間、そうしたとおっしゃっていました。永野さんは弟の姿を見て、とても驚いたそうです。弟はズボンがビリビリで、顔がパンパンに腫れ上がって全身やけどをしていました。その数日後、弟は亡くなりました。たった一つの原子爆弾が人々から笑顔を、そして命を奪ってしまうのだなと思いました。永野さんは思い出したくない原爆のことを一生懸命話してくれたので、これからは私たちが次の世代に伝えていきたいです。

～ 目に見える放射線 ～

原爆落下中心地近くに下の川という川があります。その川には、被爆直後たくさんの人々が水を求めてきました。川にはあぶらのようなものが一面に浮いていましたが、喉が渴いてたまらない人々はそれを気にせず飲んでしまいました。しかし、そのあぶらのようなものは放射線によるもので、体にとっても害を及ぼすものだったのです。それによって、死亡する人や病気にかかってしまう人が増えてしまいました。その話を聞くまで放射線の影響について詳しく知らなかったもので、その事実を知って私はただただ驚きました。なぜなら、目に見えない放射線が「あぶらのようなもの」として目に見える形で現れるほど強い影響力を持っていることを知ったからです。



～ 二つのガラス ～

原爆資料館には、二つのガラスの破片が展示されています。これはただ原爆の影響で割れて飛ばされたものではありません。爆風によって割れた無数のガラスの破片が人の体に刺さり取り出されず、数十年後に手術によって足の先から取り除かれたものです。すべて取り除くことのできないほどのガラスが刺さったのだと思い、驚きと同時に恐怖も感じました。

～ 平和の旅を終えて ～

私がこの旅に参加して一番に感じたことは「平和の尊さ」です。被爆者の方々は口を揃えて「長崎を最後の被爆地に…」と言っています。この願いを世界に広めるために私たちができること…。それは、大切な家族や友達に自分の言葉で伝えていくこと。世界で最も悲惨な出来事を経験した長崎だからこそ、平和への願いや思いが強い。その平和への願いや思いを長崎から日本へ。日本から世界へ広めていかなければならないと私は思います。

悲劇を繰り返さないために

志村第四中学校 2年 石田 泰造

1945年8月9日11時2分、長崎に原爆が投下されました。それによりたくさんの人々が被害を受け死者だけでも17万人を超えています。そして僕は今回長崎平和の旅に参加しました。そこでは、たくさんの方のことを学びたくさんの方の話を聞きました。

一日目 被爆者の方々の話を聞いて

一日目は被爆者の方々の話を聞きました。その話の中で特に印象に残ったことがあります。参加者のなかで被爆者の方に「どうすれば世界から争いをなくすことができますか？」と質問している人がいました。被爆者の方はその質問に対して「とにかく争いをしないでください。自分のクラスの中でもいい、喧嘩をなくすようにしてください。」とこたえていました。喧嘩をなくすこれはとても小さなことかもしれませんが、しかしそれが今の僕たちにできる一番大きなことだと思います。

二日目 平和祈念式典に参加して

二日目は平和祈念式典に参加しました。平和祈念式典にはたくさんの方々が出席していました。そしてそこではたくさんの方々の話を聞くことができました。その中でも長崎市長の田上さんのお話はとても印象に残りました。田上さんは「原爆はすべてを奪い去ってしまう」とおっしゃっていました。確かに僕はその通りだと思います。だからこそ、「原爆を繰り返してはいけない」このことを参列したたくさんの方々に分かってもらえたことは大きな進歩だと僕は思います。

三日目 原爆資料館に行って

三日目には原爆資料館に行きました。そこでは、具体的な原子爆弾の仕組みや被害について学びました。そこで見た写真や絵には、目もやれないようなものがたくさんありました。しかし、僕はそこから目をそらしてはいけないと思いました。何故なら、それらの写真こそが原爆であり、そこから目をそらすことは原爆から目をそらすことと同じだと思うからです。そして、僕がそこで見た写真や絵をたくさんの方の人に見てほしいと思います。

最後に

今回僕が長崎平和の旅に参加して得たものがたくさんあります。しかし、それらは体験した僕自身でしかわからないものであり、それで終わりではいけないと思います。だから、僕は今回の旅で得た知識や感じた原爆の恐ろしさを、なるべくたくさんの方の人に伝えていけるように、僕ができる限りの努力をしていきたいです。

平和への思いを強く ～長崎平和の旅～

志村第五中学校 2年 中西 環



長崎平和祈念像(左)と板橋区平和祈念像(右)

<青少年ピースフォーラム>

会場に着き、初めに被爆者である永野さんの実体験を聞きました。永野さんのお話で一番印象に残っていることは、永野さんが1945年の4月に鹿児島県に疎開していた弟と妹と一緒に暮らしたいと周囲の反対を押し切り長崎に連れ帰ったところ、8月9日にアメリカによって原爆が投下され、大切な弟と妹を爆死させてしまい、連れ帰ることを反対していた母に亡くなる直前まで会話してもらえなかったというお話です。私が永野さんと同じ立場であったら、弟妹と共に暮らしたいので同じ行動をとってしまったと思います。しかし、「家族と共に過ごしたい」という当たり前の思いにより、大切な家族の命を失わせてしまった永野さんの思いを考えると、これほど悲しく、辛く、苦しいことは他には無いと思いました。その後、原爆による被害を実際に見て回るフィールドワークに参加しました。爆風によってずれてしまった柱や原爆投下当時の地層など、痛々しい原爆の爪跡に恐怖を覚えました。

<平和祈念式典>

平和祈念式典では「戦争が生んだ被爆の体験をどう受け継いでいくか」という長崎市長の言葉が印象に残りました。私は話を聞き、これからの時代が平和であるために何が私にできるのかを考えました。私たち若い世代が被爆や戦争をよく知り、語り継いでいくことで、戦争や原爆を過去の出来事として風化させないことが私たちにできる平和への第一歩だと考えました。

<原爆資料館>

原爆資料館では1つ1つの展示物に原爆の恐ろしさを強く感じ、心が痛みました。展示物の中には、黒焦げになった少年の写真、黒焦げになったお弁当、ガラスが溶け6本のピンがくっついてしまったもの、死体のそばであるにも関わらず立ち尽くす少女の写真などがありました。私は人の命だけではなく、人の感情をも奪ってしまった原爆をさらに強く恐ろしく思いました。

<最後に>

長崎平和の旅を通して、私は「平和であることの尊さ」、そして「戦争・原爆の恐ろしさ、悲惨さ」を学びました。この辛い歴史が決して繰り返されないよう、長崎を最後の被爆地とするために、長崎平和の旅で学んだことや感じたことを家族や友人だけでなく、できる限り多くの人々に伝え、「未来の平和を守る気持ち」を持ち続け、行動していきます。大変貴重な体験ができたこと、多くの方々に感謝いたします。ありがとうございました。

平和を守る

西台中学校 2年 岡村 美喜



今から71年前の1945年午前11時2分、長崎に原子爆弾が投下されました。7万人以上の人々が亡くなり、原爆症で苦しむ人・後遺症の残る人が大勢出る、悲しい出来事となってしまいました。8月9日に長崎に原爆が投下されたことは、テレビのニュースや新聞等で理解していたつもりでしたが、今回、平和の旅に参加させていただき、私は『平和の尊さ』『戦争の悲惨さ』『原爆の恐ろしさ』を実感し、「これからは、戦争を知らない私たちが平和を守っていかねばいけません」と強く思った次第です。

【1日目：青少年ピースフォーラムにて】

被爆体験講話会で、16歳の時に被爆された永野悦子さんの体験を聞きました。

永野さんはおっしゃいました。「平和を守って行って欲しい。願いをこめて・・・」と。ご自身の辛い体験を私たちに伝えたいという強い思いが心に響きました。

私が周りの人にその話を少しでも伝えることが、平和を守ることにつながるのではないかと思います。

平和公園とその付近でフィールドワークを行った際は、浦上天主堂の一部が暴風によってずれていたりと、当時の地層に様々な瓦礫や食器が埋まっていたことを見て、改めて『原爆の恐ろしさ』に衝撃を受けました。

【2日目：平和祈念式典にて】

平和公園の至る所に数え切れない程の折り鶴があり、多くの人々の平和への願いと感じました。式典では、初めに被爆者合唱団『ひまわり』による合唱『もう二度と』を聞きました。“もう二度と作らないで私たち被爆者を”という歌詞が心に残り、被爆者の方々の思いが強く伝わってきました。

11時2分、長崎の鐘が鳴り響く中で黙とうをした時、「71年前のこの地で、この瞬間に大勢の人々が亡くなり、苦しんでいたんだ」と思い、とても心が痛みました。

【3日目：原爆資料館にて】

私が印象に残ったのは長崎に投下された原子爆弾『ファットマン』の模型です。ファットマンの大きさは大人2人分くらいでしたが、この大きさと長崎の町を壊し・燃やし、7万人以上もの人々が殺されてしまったのかと思うと恐ろしかったです。



私は、今回の平和の旅で原爆・戦争の脅威を感じ、学びました。

この経験を活かし、身近なところから、小さなことからでも平和を広げ、守っていきます。

人々の生活・大切な人・町・物などを壊し、失わせてしまう戦争を二度とおこさないために、

もう二度と被爆者を出さないために。平和を守り続けるために・・・。

平和への道を歩むために



中台中学校 2年 田中 さえ

今から 71 年前の 1945 年 8 月 9 日午前 11 時 2 分、長崎に原子爆弾が投下されました。たった一つの原爆が、一瞬にして長崎からすべてを奪い去った日、人々は何を思っていたのでしょうか。私は今回の長崎平和の旅で実際に長崎に足を運び、自分の目や耳、肌や心で戦争の悲惨さ、平和の尊さ、人々の思いを学びました。

《被爆体験講話》

私たちは青少年ピースフォーラムに参加し、被爆当時 16 歳だった永野悦子さんのお話を聞かせていただきました。永野さんのお話は私の心に突き刺さってきました。原爆により、永野さんの弟、妹は亡くなりました。2人は鹿児島に疎開していたそうです。その時、永野さんは長崎にいました。永野さんは寂しくなり、嫌がる2人を無理矢理長崎に連れてきました。その後、長崎に原爆が落とされ、2人は苦しみ、亡くなりました。永野さんは後悔したそうです。死んで償おうと考えたこともあったそうです。この話を聞き、私は原爆の破壊力を知りました。原爆は体だけでなく、心をも壊してしまうものなのだ。もう二度と戦争を起こしてはいけないと、この時、改めて強く思いました。

《平和祈念式典》

平和祈念式典の会場に足を踏み入れた時、私は驚きました。会場の至る所に、千羽鶴が飾られていたのです。たくさんの方が平和を願っているのだと、実感しました。

平和祈念式典で私の心に残ったことは、被爆者代表である、井原東洋一さんが言った言葉です。『ナガサキ マスト ビーザラスト』

原爆が落とされるのは、長崎で最後にしなければならない。

この言葉は、世界中の人の心に残ってほしいです。

《長崎原爆資料館》

原爆資料館では、原爆による被害を学びました。熱線で、手の骨とガラスが溶けてくっついているものなど、様々なものがありました。戦争で亡くなった人々の気持ちを考えると、心が締め付けられました。



『まずは隣の人と仲良く、それからどんどん周りの人と仲良くなって、それを、社会に出ても続けていく。』これは永野さんが考える、平和への道です。その通りだと私は思いました。被爆者の平均年齢は 80 歳を超えました。被爆者の方々は、強く平和を願っています。その強い願いを、私たち若い世代が受け継がなければなりません。平和はとても尊いものです。平和への道を歩むことができる世界を、私たちが創っていきます。

唯一の被爆国として

上板橋第一中学校 2年 中尾 友美

我が国、日本は世界で唯一の被爆国です。知ってのとおり近年では原爆の被害を受けた方や、戦争そのものを知っている方々が減って戦争の恐ろしさや惨さを私たちの世代がどう伝えていくか、という問題もあります。そこで私も改めて平和について考えようと、今回この旅に参加させていただきました。

最初に、フィールドワークでは実際に被爆した場所や建物を見て回ることができました。

その中でも一番印象に残ったのは被爆当時の地層です。お椀やお皿などの食器、屋根瓦やペンチやパイプが土の中に割れたり欠けたりして埋まっているのを見ると、当時の原爆の被害の様子がどれだけひどく残酷だったかというのが分かりました。

二日目は平和祈念式典に参加しました。そこでは被爆者の方々の平和への願いをこめた合唱や皆さんの平和宣言を聞くことができとても感動し、それぞれの平和への願いが伝わってくるように思えました。宣言がなされ鳩が飛び立つとき、自分もすべての国が平和になるよう、努力を重ねる使命があることを感じました。

三日目には、長崎原爆資料館・追悼平和祈念館へ行きました。追悼平和祈念館ではあちらこちらで水の音を聞くことができますが、なぜだと思いませんか。それは、当時被爆して大怪我を負った方たちが水を飲みたくても飲めないまま大勢亡くなってしまわれた為、その方たちを悼んで沢山の水音が聞こえるようにしたそうです。原爆資料館では、実際に原爆で溶けてしまったもの、焼けてしまったもの、影が焼きだされてしまったものまでありました。そのほかに当時の体験談や、世界の国々がどれだけ核を保有しているか、核爆弾のモデルなどがありどれも初めて目にしたので全てが衝撃的でした。

最後に、この旅を通して原爆はもちろん、絶対に戦争は繰り返してはならないこと、戦争は誰も幸せにしないことを、改めて痛感しました。

一日目に被爆者の方の講演で、「ただただ、私は世界が平和であってほしい」という言葉を聞いて、ああ、確かにそれ以上のことはない。つらい戦争の時代を生きてきた方には、それがなによりなのだ。私たちもそれを理解しなければ、この惨い戦争を語る権利はないと胸が痛くなるほど感じさせられました。

私は、唯一の被爆国の国民として、そのことを皆さんに伝えつづけようと思います。

戦争がなくなるその日まで。

この旅で学んだこと

上板橋第二中学校 2年 伊藤 杏華里

私は、この長崎で普段はできないことを、たくさん経験させていただきました。特に印象に残ったのは、被爆体験講話会、平和祈念式典、原爆資料館の見学でした。

1. 被爆体験講話会

被爆当時16歳の永野悦子さんのお話でした。その日は、空襲警報が解除されみんなが外に出ていたそうです。悦子さんも家の外に出て働いていました。11時2分に原爆が落ちた瞬間、ドーンと音がなり、仕事をしていた体育館の中から窓の外を見ると色々なものが飛び交っていました。その後、焼け野原の中を一人で必死に歩き、自宅付近でお父さんに出会えた時、二人は抱き合って大声で泣いたとのことでした。

私はこの話を聞いて、たくさんの人たちの日常の平和を、一瞬で奪い去ってしまう原爆は、なんて恐ろしいものなのだと思います。

2. 平和祈念式典

とても多くの人が集まっていました。初めに実際に被爆に遭われた方たちの合唱がありました。題名は「もう二度と」。「もう二度と作らないで私たち被爆者を」という歌詞があり、被爆者の方々の気持ちが強く伝わってきました。その後に、色々な方々のお話がありました。

たくさんの方々の被爆者の方たちの思いや、色々な方々のお話から、原爆の力の恐ろしさを実感しました。そして被爆者の方々の平均年齢がもう80歳を超えてしまったことで、このまま原爆の恐ろしさ、戦争の恐ろしさを風化させてはいけないなと思いました。

3. 長崎原爆資料館

「全身やけどの子」の写真や「焼け野原」の写真など、当時の様子が写っている写真がありました。そして「11時2分で止まった時計」や「像」、ファットマンの実物大の模型等、原爆当時のものも置いてありました。

想像を絶するものでした。こんな事が日本で本当にあったのだと驚きました。

4. まとめ

私はこの旅で、色々な場所に行き学ばせていただき、戦争という悲惨な事が日本であったという事を多くの人に伝えていきたいと思いました。そして、いま普通に暮らせていることに感謝し、生きていこうと思います。

未来のために

上板橋第三中学校 2年 金田 菜楠

「戦争のないこの平和をみんなの手で守ってほしい」

これは、被爆者の永野悦子さんが語った願いです。1945年8月9日午前11時2分。長崎が火の海と化し、多くの悲しみをうみました。このことを忘れないために、私たちが伝えていくことが使命だと思います。

1日目に被爆者の永野さんから被爆体験のお話を伺いました。永野さんは、16歳で被爆しました。永野さんには、妹と弟がいました。原子爆弾投下前、妹と弟は鹿児島に疎開していました。しかし、永野さんのわがままで嫌がる2人を長崎に連れて帰って、被爆し、亡くなりました。永野さんは、自分のせいだと自分を責め続け、「死にたい」と思ったそうです。そんな永野さんの気持ちを変えたのは友人の「あなたがお母さんやお父さんを守らなければいけない。」という言葉でした。長崎の人々は辛い中でも支えあっていました。しかし、「死にたい」と思わせる原子爆弾は絶対あってはならないと強く思いました。

8月9日、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列しました。様々な方々の平和への想いを聞きました。その中でも特に、長崎市長の長崎平和宣言が心に残りました。その平和宣言のなかに「若い世代の皆さん、未来のために、過去に向き合う一歩を踏み出してみませんか。」とありました。戦争や原子爆弾について学んで、被爆者の平均年齢が80歳を超えた今、私はどんな一歩を踏み出すべきか深く考えました。そして、11時2分、これからの平和を祈り黙とうをしました。

長崎原爆資料館を見学しました。資料館には、原子爆弾の怖さを物語るものが多く展示されています。11時2分でとまった時計、手の骨とガラスが共に溶けたもの、大やけどをおった少年、茶色く焦げたお弁当。原子爆弾の恐怖を思い知りました。



私は、この旅で、戦争や命の尊さ、平和への思いがより一層強くなりました。憎しみしかうまない戦争はもう二度としてはいけない、この平和を皆で守らなければいけない。私は、この平和を守るために、多くの人にきのこと雲の下で起こった悲惨な出来事を知ってもらいたいです。私が今できる事はクラスの人、学校の人、家族など身近な人に伝えていくことです。平和は、私一人で作れるものではありません。戦争のない平和な未来のために、私は、未来のための第一歩を踏み出し、私たちの使命を果たしていきたいです。



世界中の人に平和の大切さを伝える

桜川中学校 2年 中村 陽菜子



1945年8月9日午前11時2分に、長崎で原爆が投下されてから今年で71年目になりました。71年がたった今、戦争や原爆の恐ろしさが少しずつ薄れているような気がします。長崎を最後の被爆地にするために、世界から核兵器をすべて無くしていくことが今の私たちの課題だと思います。

* 平和祈念式典に参加して *

私が平和祈念式典に参加して感じたことがあります。原爆が投下されてから71年が経ち、被爆者の方々の平均年齢が80歳を超えて、被爆体験談を語っていく人が少なくなっています。このままでは戦争や原爆の恐ろしさが薄れていき、また過去と同じことを繰り返すことになると思います。それを繰り返さないためにも、今の若者たちが次の世代の人達に被爆体験談を語り継がなければならないと思います。

* 原爆資料館を訪れて *

私が原爆資料館を訪れて感じたことは、このようなことが本当にあったのかと疑ってしまうほど恐ろしいものばかりだったということです。身体が黒こげになってしまった人の写真や、熱線で手の骨とガラスが一緒になって溶けてしまったものなどたくさんありました。私は目の前でそのような写真やものを見て、原爆の恐ろしさがわかりました。

* 被爆建造物を実際に見て *

被爆建造物を実際に見て、このような大きな建物が一瞬にして潰れたり、崩れてしまったりしたのだと思うと原爆の威力がとてつもなくすごかったのだと思います。私は浦上天主堂を見学しましたが、マリア像の指先は熱線のせいで無くなっていたり、ヨハネ像は原爆によって黒いすすがついていたりする部分がありました。写真だけでは感じることのできない怖さを体験しました。

* 私が思う平和とは *

私は、この旅に参加する前は“平和”というものがあまりよくわからず、どうすれば世界が平和になるのだろうと疑問に思っていました。しかし式典に参加したり、ピースフォーラムでのピースボランティアの説明を聞いて、平和な世界とは戦争が無く、皆が笑顔で過ごせるものだわかりました。この旅で学んだことを大勢の人に伝えていくことが私の役目だと思います。



長崎平和の旅に参加して

向原中学校 2年 野々村 尚槻

<はじめに>

僕は長崎平和の旅に参加して良かったと思っています。今まで僕は平和についてあまり深く考えた事はありませんでした。平和について考え、知る事ができたこの3日間はとても貴重な時間でした。戦争の悲しさ、平和の大切さ、原爆の恐ろしさを実感しました。

<平和祈念像>

一番印象に残っているのが平和祈念像です。平和祈念像は全てに意味がありました。じっくり見ているうちに、この像には、色々な思いがこめられていると感じました。

垂直に高く掲げた右手は原爆の脅威を、水平に伸ばした左手は平和を、横にした足は、原爆投下直後の長崎市の静けさを、立てた足は、救った命を表しています。「この像には大切でとても強い意味がこめられている。」そう思いました。



<平和祈念式典>

式典では、被爆者合唱を聞きました。

被爆者の思いを直接歌詞に表していて、とても心に残りました。

平和宣言の後、平和の象徴の鳩が空に一斉に飛び立って行ったときは、鳥肌が立ってとても感動しました。

<原爆資料館>

僕が長崎に行って、一番原爆の恐ろしさについて触れ、考える事ができた場所です。

資料館には、原爆が爆発した11時2分を指して止まった時計や投下されたファットマンの模型、熱線より溶かされたガラス瓶など恐ろしさを物語っているもの様々な物がありました。中には、放射線を受け焼けただれた人の写真など、見ていられない程でした。

<まとめ>

僕にとってこの長崎平和の旅は、本当に貴重な3日間でした。平和の大切さを改めて知れて良かったと思います。もう、このような体験はできないと思っています。この体験から学んだことを一生忘れることなく平和を願っていきたいと思います。

平和の継承

赤塚第一中学校 2年 足立 大祐

今回、僕は原子爆弾が落とされて71年が経つ長崎の街を訪れました。市街地は本当に原爆が落とされたのかと疑ってしまうほど栄えていましたが、爆心地に近づくとその爪痕がしっかりと残されていました。事前に調べたようなことから到底感じ取れない、たくさんの方のことを汲み取ってくることができました。

初日は青少年ピースフォーラムに参加し、被爆体験講話会で永野悦子さんのお話を伺いました。永野さんは、周りの反対を押し切り避難先の鹿児島から弟と妹を長崎へ連れて帰りました。しかし、そのせいで弟と妹は被爆して亡くなってしまったのです。母親ともあまり話さなくなって永野さんは自ら命を絶とうと考えますが、友人の言葉もあり精一杯生きて償おうと思うようになったそうです。このような経験を語るのは本当に辛いことだと思います。それでも語り部としてお話ししてくださるのは、もう二度と繰り返したくないという強い思いがあるからだと思います、深く共感し感銘を受けました。

二日目は、平和祈念式典に参加させていただきました。たくさんの方々のお話を聞かせていただきましたが、最も心を打たれたのは長崎市長の田上富久さんのお話でした。特に印象深かった箇所をいくつか引用させていただきます。「戦争、そして戦争が生んだ被爆の体験をどう受け継いでいくかが、今、問われています。」「若い世代の皆さん、未来のために、過去に向き合う一歩を踏み出してみませんか。」

これらの言葉は、僕にも深く関わっていることだと感じました。被爆から71年、被爆者の平均年齢も80歳を超え、初日にお話を伺った永野さんのように被爆体験をした方が少なくなっています。過去を知り、被爆者の方々の意思を引き継いでこれからの世代に発信していくことが大切だと思いました。

三日目は、長崎原爆資料館・追悼平和祈念館に行きました。原爆資料館では、たくさんの資料から改めて原爆の威力や恐ろしさを感じることができました。大きさは3メートル程度しかないのに、周囲を何キロメートルも巻き込んで一瞬にして焼け野原や廃墟へと変えてしまう。僕には想像もつきませんでした。また、平和追悼祈念館では、原爆の犠牲になった方々のご冥福をお祈りするとともに、これからの恒久平和をしっかりと祈ることができました。どちらの場所も、原爆・平和について考え直す良いきっかけになりました。

平和を守っていくためにも、この戦争・被爆の記憶は絶対に風化させずに次の世代へと引き継いでいくことが大事だと今回の長崎平和の旅に参加して強く感じました。戦争を体験している人が年々少なくなっている中、全ての方が「核兵器廃絶」という共通の意識を持てるようにするには、実際に体験された方から見聞きしたことを社会全体に発信していくことが重要だと思います。僕はこの平和の旅をその第一歩だと考え、これからの担う一人として使命感を持って平和を継承していきたいと思います。このような貴重な体験をし、原爆や平和について改めて考え直すきっかけを与えてくださり、本当にありがとうございました。

これからも平和を守っていくために

赤塚第二中学校 2年 石井 朋花

—偶然によって生死が決まる—

1945年8月9日11時2分、「ファットマン」によって長崎の町は一瞬にして壊されました。爆心地周辺では、当時300世帯、860人の人が暮らしていたそうですが奇跡的に生き残ったのは黒川幸子さんだけでした。長崎駅を境に被害の大きさは格段に違っていたといいます。そのときどこにいたかで生死が変わってしまう。その事実は恐ろしいと思います。このことは永野さんの話でも実感しました。永野さんは16歳で被爆しました。永野さん自身は2.8Km先で軍事作業をしていたため助かりました。しかし自宅近くにいた弟は全身火傷をし、3日後に亡くなってしまったそうです。また、母と妹も原爆症で苦しみ、妹は1か月後に亡くなりました。永野さんにはある後悔がありました。それは弟と妹を無理やり疎開先から長崎に連れてきてしまったことです。母親からは「嫌がったら疎開先にそのまま置いてきなさい」と念を押されたそうですが無理に連れてきたことで自殺を考えてしまうほど自責の念に追われました。しかし、「あんたは生かされている」と友達に言われたことで強く生きようと決意したそうです。

—1つの行動によって大勢の方の人生を一瞬にして壊してしまう—

原爆投下によって2016年8月9日までに亡くなった方の人数は17万2230人です。今戦争が始まり核兵器を使って戦うのならば、もっとひどい惨劇を生んでしまうのではないのでしょうか。

—Nagasaki must be the last.— (長崎市 被爆71周年平和祈念式典資料より引用)

平和祈念式典では長崎市長や被爆者代表の井原さんは核兵器廃絶を強く求めています。今の私達にできるのは「みんなと仲良くする」ということですが、「核兵器廃絶」を訴えられる言葉を持っています。心を持っています。平和について関心を持ち、本来の意味での「平和」を探求していくことが大切なのではないのでしょうか。この思いをしっかりとくみ取って未来へとつなげていくことが大切だと思います。

私達は長崎で起こった惨劇の跡を見ました。その実情を伝えていくのが、平和の旅に参加した私達の使命だと感じています。私達は、幸い戦争の被害にもあっていません。しかし、これから生まれてくる子供達は戦争の被害を受けないという保証はありません。憲法改正が騒がれている今、平和への関心も高まっています。これからの未来を創っていくのは私達。学んできたことを色々な人にしっかりと発信していきたいと思います。

長崎平和の旅を支えてくれた皆さん、本当にありがとうございました。



「長崎」から「ナガサキ」へ

赤塚第三中学校 2年 佐藤 向日葵

戦争、そして平和とは何か。今、私たちにできることはどのようなことがあるのか。長崎平和の旅は、この3つのことを深く学び、考え、自分なりに答えを探す、そんな3日間でした。

<戦争とは>

国と国とが戦い、勝敗を決めるだけのものではありません。家族との他愛のない会話、友人との楽しい時間、好きな人の忘れられない笑顔……。この全てを奪い去ってしまうものこそが戦争です。そして、数多くの尊い命が奪われ、たくさんの人の笑顔や思い出、夢や希望までも壊してしまう、これからの世界にあってはならない、とても悲惨なことです。私たちは1日目にピースフォーラムとして被爆体験講話を聞かせていただきました。その話から本やインターネットで調べただけでは感じられない原子爆弾の恐ろしさ、キノコ雲の下の実際の人々の被害について知ることが出来ました。被爆を体験した永野さんは、家族で自分だけが生き残り、自分自身は平和を、そして次世代の戦争を知らない子供たちを守るために生かされていると感じているそうです。

<平和とは>

私は、一人一人が思いやりのある温かい心を持ち、世界中の平和を願うことだと思います。私たちは2日目に長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参加しました。「なぐさめ はげまし 長崎の あゝ 長崎の鐘が鳴る」これは式典で歌われていた“長崎の鐘”の一部です。この曲は黙祷の時に鳴らされる長崎の鐘がタイトルになっていて、平和への強い思いが感じられました。

<今、私たちができること>

戦争の悲惨さ、平和の尊さについて学び、考え、次世代へ伝えること。そして、まずは今自分の隣にいる人と仲良くし、当たり前の日々に感謝することだと思います。3日目には長崎原爆資料館、追悼平和祈念館を見学させていただきました。そこには午前11時2分で時が止まっている時計や中身が灰になってしまった弁当箱などを見て、原爆の威力の強さを痛感しました。



私はこの3日間、戦争や平和について深く、そして強く考えました。長崎が最後の被爆地であるように、今回私たちが学んだことをたくさんの人に伝え、平和な世界を若い世代でつないでいきたいです。

平和へ向かって

高島第一中学校 2年 工藤 詩織

1945年8月9日午前11時2分、長崎に「ファットマン」という名の原子爆弾が投下されました。その一発により、多くの人々の命が奪われてしまいました。8月9日におきてしまったその出来事を、人々は絶対に忘れず、伝えていかななくてはならないのです。

1日目 被爆体験講話

被爆者である永野悦子さんのお話を聞き、被爆当初の長崎の様子をより鮮明に思い浮かべることができました。建物が崩れ、道がなくなってしまった、自分達が今まで過ごしていた町。その光景を見て、あなたならどう思いますか？私ならきっとただ呆然と立ち尽くしてしまうと思います。一刻も早く、避難や救助をしなくてはならないのに、それを考えることもできないでしょう。想像するだけでも怖くなってしまいう原爆。永遠に使ってはいけないと、改めて感じました。

2日目 平和祈念式典

平和祈念式典に参加し、長崎市民の方々の願いを理解することができました。その内容は、「オバマ大統領に、長崎にも訪れてほしい」と、「長崎を最後の被爆地にしてほしい」と、「これ以上被爆者を増やさないでほしい」というものです。私は、どれもその通りだと思いました。この願いが叶うよう、私達が伝えていかななくてはならないと思います。

3日目 原爆資料館

原爆資料館は、私にとってとても印象的でした。溶けて繋がってしまった瓶や、黒くなったお弁当、体に刺さったガラスの破片……。どれも心に響き、胸が苦しくなりました。それと同時に、今の平和の尊さを、強く実感しました。この平和は、絶対に失わないようにしたいです。

この長崎での3日間を通して、今ある平和、そして命がどれだけ大切で、尊いものなのかを考え、感じるすることができました。原爆投下時と今の町は大きく変わっています。人々が平和へ向かってどれだけの努力をしたのかがわかります。そのため私は、いろいろな人に長崎を訪れてほしいです。そして目で見て、耳で聞いて、たくさんのことを理解してほしいです。世界中から核兵器がなくなるように、多くの人で力を合わせ、世界を変えていきたいです。このような考えを持つ機会を与えてくださった皆様、本当にありがとうございました。

争いのない未来を

高島第二中学校 2年 村上 かりん

私達は8月8日から3日間、戦争の悲惨さや平和の尊さ、長崎の現状等を知るための長崎平和の旅に参加しました。

今回の平和の旅では、被爆体験者の方の講話を聞き、平和祈念式典に参加し、戦争当時の悲惨な爪痕が残る場所の見学などをしました。被爆体験者の方のお話では、想像を遥かに超えるような辛い当時の状況にとっても驚きました。私達にお話をしてくださった語り部の方は、原爆により大切な家族を失ったそうです。その方だけではなく、たくさんの方が大切な人を失ったと話してくださいました。私は戦争や原爆が一瞬で大切なものを奪っていった現実を目の当たりにし、改めて争いのない平和な世界の重要性に気づかされました。

翌日の平和祈念式典には、世界中から沢山の方が参加されました。多くのメッセージの中で、「長崎を最後の被爆地にしなければいけない」という事、「核兵器をなくすことの重要性」が強く訴えられていました。私は式典に参加をして、これから私達が作っていく未来を戦争や原爆、核兵器をない世界にする必要性を、より強く感じました。私達の行動で長崎が最後の被爆地になるかもしれません。いえ、最後にしなければいけないのです。

旅の締めくくりとして原爆資料館を見学しました。資料館では原爆のすさまじい威力と恐ろしい実態を自分の目で確かめることでその怖さをより痛感しました。



自分が考えていた原爆の恐怖の何倍も過去の現状は恐ろしく、とても辛く胸が締め付けられるようでした。私が沢山の展示物の中で一番印象に残ったものは、原爆の熱によって体が焦げ、道で倒れている子供の写真です。その体や周囲の状態からは嫌という程、原爆の強さ、怖さが溢れ出ていました。また、残された遺品にも原爆の悲惨な爪痕が残されていました。資料館には原爆の恐ろしい被害や、亡くなられた方々、大切な人を失った方々の思いが見え、目を背けたくなるほどでした。悲しさや悔しさな

どが入り混じっている展示物の1つ1つが原爆の恐怖を物語っており、言葉にならないほどの思いが心に重くのしかかってきました。

私はこの旅を通して、これから私達がすべきこと、しなければいけないことを学ぶことができました。この旅で学んだ原爆の恐ろしさを私達が語り継いで、原爆のない、核兵器のない、戦争のない平和な世界を作っていきたいです。

被爆地は長崎で最後にするために。。。

平和のために

高島第三中学校 2年 内田 実咲

1945年8月9日11時2分、ナガサキの風景が一変しました。1つの原子爆弾は建物や人を燃やし、空を赤色に染め、その結果膨大な数の人が亡くなりました。

私は3日間の長崎平和の旅に参加し、平和とは何か深く考え、原爆の恐ろしさや、平和の尊さについて学びました。

《 被爆者の永野さんの話を聞いて 》

私が永野さんの話で印象に残ったことは永野さんが繰り返し、「戦争をすると家族などの自分の好きな人が死んでしまい、苦しむ人がある。」と仰っていたことです。私は好きな人がいなくなる苦しみを感じたことはないけれど、想像してみるだけで悲しくてとても苦しいのだとわかりました。そして戦争により、自分の大切な人がいなくなることはない現在の日本は、平和なのだと思います、この平和な世界がこれからも永遠に続くことが大切だと考えました。



《 平和祈念式典に参加して 》



長崎市長の田上さんが述べていた長崎平和宣言は、「核兵器は人間を壊す残酷な兵器です。」という一文から始まりました。この「人間を壊す」という文が私の中では、ひどく悲しく響き渡りました。日本に原爆が投下されたのは戦争を終わらせるためだったと聞きます。実際、日本は白旗を揚げ戦争は終わりました。しかし、そのために日本がこうむった被害はとても大きなものでした。原爆は罪のない子供や老人、女性を真っ黒に焼き、原爆症などの病にかけ、一瞬にしてあたり一面を焼け野原に変えてしまいました。

私はこのようなことがもう二度と起こらないように長崎を最後の被爆地にするため、オバマ大統領も言っていたように世界から核をなくすことが必ず成し遂げなければならないことなのだと感じました。

私はこの3日間で「平和とは何か」と考えました。それは自分の周りの人と仲良くでき、常に笑っていられるどこにでもあるような日常が平和なのではないかと考えました。そしてこの日常をいつまでも続けるために、一人一人が笑っていられるような空間を作ることが大切なのだと思います。

第3部 資料編

広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式
HIROSHIMA PEACE MEMORIAL CEREMONY

平成28年(2016年)8月6日

August 6, 2016

広島市

The City of Hiroshima

式次第

Program

開 式	8 : 00	Opening
原爆死没者名簿奉納 広島市長 遺族代表	8 : 00	Dedication of the Register of the Names of the Fallen Atomic Bomb Victims Mayor of Hiroshima Representatives of the bereaved families
式 辞 広島市議会議長	8 : 02	Address Chairperson of the Hiroshima City Council
献 花 広島市長 広島市議会議長 遺族代表・こども代表 被爆者代表 来 賓	8 : 07	Dedication of Flowers Mayor of Hiroshima Chairperson of the Hiroshima City Council Representatives of the bereaved families and children Representatives of the atomic bomb survivors Distinguished guests
黙とう・平和の鐘	8 : 15	Silent Prayer and Peace Bell
平和宣言 広島市長	8 : 16	Peace Declaration Mayor of Hiroshima
放 鳩		Release of Doves
平和への誓い こども代表	8 : 22	Commitment to Peace Children's representatives
あいさつ 内閣総理大臣 広島県知事 国際連合事務総長	8 : 26	Addresses Prime Minister of Japan Governor of Hiroshima Secretary General of the United Nations
ひろしま平和の歌（合唱）	8 : 40	Hiroshima Peace Song (chorus)
閉 式	8 : 45	Closing

平和宣言

1945年8月6日午前8時15分。澄みきった青空を切り裂き、かつて人類が経験したことのない「絶対悪」が広島に放たれ、一瞬のうちに街を焼き尽くしました。朝鮮半島や、中国、東南アジアの人々、米軍の捕虜などを含め、子どもからお年寄りまで罪もない人々を殺りくし、その年の暮れまでに14万もの尊い命を奪いました。

辛うじて生き延びた人々も、放射線の障害に苦しみ、就職や結婚の差別に^あ遭い、心身に負った深い傷は今なお消えることはありません。破壊し尽くされた広島は美しく平和な街として生まれ変わりましたが、あの日、「絶対悪」に奪い去られた川辺の景色や暮らし、歴史と共に育まれた伝統文化は、二度と戻ることはないのです。

当時17歳の男性は「真っ黒の焼死体が道路を^{ふさ}ぎ、異臭が鼻を^つ衝き、見渡す限り火の海の広島は生き地獄でした。」と語ります。当時18歳の女性は「私は血だらけになり、周りには背中の皮膚が足まで垂れ下がった人や、水を求めて泣き叫ぶ人がいました。」と振り返ります。

あれから71年、依然として世界には、あの惨禍をもたらした原子爆弾の威力をはるかに上回り、地球そのものを破壊しかねない1万5千発を超える核兵器が存在します。核戦争や核爆発に至りかねない数多くの事件や事故が明らかになり、テロリストによる使用も懸念されています。

私たちは、この現実を前にしたとき、生き地獄だと語った男性の「これからの世界人類は、命を尊び平和で幸福な人生を送るため、皆で助け合っていきましょう。」という呼び掛け、そして、血だらけになった女性の「与えられた命を全うするため、次の世代の人々は、皆で核兵器はいらないと叫んでください。」との訴えを受け止め、更なる行動を起こさなければなりません。そして、多様な価値観を認め合いながら、「共に生きる」世界を目指し努力を重ねなければなりません。

今年5月、原爆投下国の現職大統領として初めて広島を訪問したオバマ大統領は、「私自身の国と同様、核を保有する国々は、恐怖の論理から逃れ、核兵器のない世界を追求する勇気を持たなければならない。」と訴えました。それは、被爆者の「こんな思いを他の誰にもさせてはならない」という心からの叫びを受け止め、今なお存在し続ける核兵器の廃絶に立ち向かう「情熱」を、米国をはじめ世界の人々に示すものでした。そして、あの「絶対悪」を許さないというヒロシマの思いがオバマ大統領に届いたことの証しでした。

今こそ、私たちは、非人道性の極みである「絶対悪」をこの世から消し去る道筋をつけるためにヒロシマの思いを基に、「情熱」を持って「連帯」し、行動を起こすべきではないでしょうか。今年、G7の外相が初めて広島に集い、核兵器を持つ国、持たない国という立場を超えて世界の為政者に広島・長崎訪問を呼び掛け、包括的核実験禁止条約の早期発効や核不拡散条約に基づく核軍縮交渉義務を果たすことを求める宣言を発表しました。これは、正に「連帯」に向けた一歩です。

為政者には、こうした「連帯」をより強固なものとし、信頼と対話による安全保障の仕組みづくりに、「情熱」を持って臨んでもらわなければなりません。そのため、各国の為政者に、改めて被爆地を訪問するよう要請します。その訪問は、オバマ大統領が広島で示したように、必ずや、被爆の実相を心に刻み、被爆者の痛みや悲しみを共有した上での決意表明につながるものと確信しています。

被爆者の平均年齢は80歳を超え、自らの体験を生々の声で語る時間は少なくなっています。未来に向けて被爆者の思いや言葉を伝え、広めていくには、若い世代の皆さんの力も必要です。世界の7千を超える都市で構成する平和首長会議は、世界の各地域では20を超えるリーダー都市が、また、世界規模では広島・長崎が中心となって、若者の交流を促進します。そして、若い世代が核兵器廃絶に立ち向かうための思いを共有し、具体的な行動を開始できるようにしていきます。

この広島の地で「核兵器のない世界を必ず実現する」との決意を表明した安倍首相には、オバマ大統領と共にリーダーシップを発揮することを期待します。核兵器のない世界は、日本国憲法が掲げる崇高な平和主義を体現する世界でもあり、その実現を確実なものとするためには核兵器禁止の法的枠組みが不可欠となります。また、日本政府には、平均年齢が80歳を超えた被爆者をはじめ、放射線の影響により心身に苦しみを抱える多くの人々の苦悩に寄り添い、その支援策を充実するとともに、「黒い雨降雨地域」を拡大するよう強く求めます。

私たちは、本日、思いを新たに、原爆犠牲者の御霊に心からの哀悼の誠を捧げ、被爆地長崎と手を携え、世界の人々と共に、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けて力を尽くすことを誓います。

平成28年（2016年）8月6日

広島市長 松 井 一 實

平和への誓い

「人が焼けるにおいがした」
「ある者は、肌が溶けて人間には見えなかった」
原子爆弾が落とされた広島の様子を、語り部の方は語ってくれました。
思い出したくない、胸が張り裂けそうだ。
被爆された人の辛さは、いつまでも、いつまでも終わることはありません。

被爆者の思いや被爆の事実を自らの体験のように、想像するのです。
聞きたくても、聞くことができなくなる日が近づいています。
一瞬で街がつぶれ、日常や夢を踏みにじられた
昭和20年(1945年)8月6日 午前8時15分の出来事を、
私たちは、もっと、知りたいのです。もっと、伝えたいのです。

悲しみや苦しみを乗り越えた人々の努力によって、
広島は青く澄んだ空の下、色とりどりの花が咲く街に復興しました。
この広島に、今年も、世界各地から、多くの人々が訪れています。
あの日の事実を知るために、平和記念公園を巡り、平和記念資料館を見学し、
語り部の方の話を聴き、原子爆弾の恐ろしさを実感しています。
そして、「あの日の出来事を伝える」と約束してくれた人たち、
平和の広がりを感じました。

私たちは、待っているだけではいけないのです。誰が、平和な世界にするのでしょうか。
夢や希望にあふれた未来は、ぼくたち、わたしたち、一人一人が創るのです。

私たちには、被爆者から託された声を伝える責任があります。
一人一人が、自分の言葉で、丁寧に、
戦争を知らない人へ 次の世代へ 世界の人々へ
命の尊さを 平和への願いを 私たちが語り伝えていきます。

平成28年(2016年)8月6日

こども代表

広島市立竹屋小学校6年

なかおく たりほ
中奥 垂穂

広島市立亀山小学校6年

あおき ゆうた
青木 優太

Commitment to Peace

August 6, 2016

“I smelled burning bodies.”

“People’s skin had melted. They didn’t even look human.”

This is what atomic bomb survivors told us about Hiroshima right after the bombing.

It seemed like they didn’t want to remember. It seemed like their hearts had been torn apart.

There will never, *ever* be an end to the pain of those who were bombed.

We imagine, as if they were our own experiences, the feelings of the *hibakusha* and what really happened on that day.

The time will soon come when, though we want to ask more, we will no longer be able to.

In an instant the city was destroyed, people’s dreams and everyday lives crushed.

August 6, 1945, at 8:15 in the morning is something we want to know more about.

It’s something we want to convey more.

It was the hard work of all who overcame their sorrow and pain that allowed Hiroshima to come back to life as a city of vibrantly colored flowers and clear, blue skies.

This is the Hiroshima that, year after year, countless people visit from all over the world.

To know what really happened, they explore Peace Memorial Park, go through Peace Memorial Museum, listen to atomic bomb survivors, and feel for themselves the terror of the atomic bombing.

Of those who come here, many promise “to convey what happened that day.”

Because of all this, we feel peace is spreading.

We *cannot* simply wait.

Who will make this world peaceful?

The future, overflowing with hopes and dreams,

Is something that we, every single one of us, shape.

We have a duty to convey the *hibakusha*’s words, which have been entrusted to us.

Each of us, in our own, deliberate words,

Will communicate and pass on

To those who do not know war, to members of the next generation, and to people around the world,

The treasure of life and the desire for peace.

Children’s Representatives:

Tariho Nakaoku (6th grade, Hiroshima City Takeya Elementary School)

Yuta Aoki (6th grade, Hiroshima City Kameyama Elementary School)

平成28年8月9日
August 9, 2016

被爆71周年 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

The 71th Nagasaki Peace Ceremony



式次第		Program
被爆者合唱	10 : 35	Chorus by A-bomb Survivors
開式	10 : 40	Commencement
原爆死没者名奉安	10 : 40	Laying to rest of the list of victims who died during the past year
式辞	10 : 42	Opening Address
献水	10 : 46	Water offering
献花	10 : 48	Flower offering
黙とう	11 : 02	Silent prayer
長崎平和宣言	11 : 03	Nagasaki Peace Declaration
平和への誓い	11 : 13	Pledge for Peace
児童合唱	11 : 18	Children's chorus
来賓挨拶	11 : 23	Addresses
合唱 千羽鶴	11 : 38	Chorus "A Thousand Paper Cranes"
閉式	11 : 43	Closing words



目次

被爆者合唱……………	1 ページ	平和への誓い……………	9 ～ 10 ページ
司会者名……………	2	児童合唱……………	11
献水の採水場所……………	2	千羽鶴（歌）……………	12
原爆死没者名簿登載者数……………	2	長崎市民平和憲章……………	13 ～ 14
式辞……………	3 ～ 4	長崎平和宣言<ことばの解説>…	15 ～ 18
長崎平和宣言……………	5 ～ 8	平和祈念式典会場周辺図……………	19

長 崎 市

City of Nagasaki

長崎平和宣言

核兵器は人間を壊す残酷な兵器です。

1945年8月9日午前11時2分、米軍機が投下した一発の原子爆弾が、上空でさく裂した瞬間、長崎の街に猛烈な爆風と熱線が襲いかかりました。あとには、黒焦げの亡骸、全身が焼けただけの人、内臓が飛び出した人、無数のガラス片が体に刺さり苦しむ人があふれ、長崎は地獄と化しました。

原爆から放たれた放射線は人々の体を貫き、そのために引き起こされる病気や障害は、辛うじて生き残った人たちを今も苦しめています。

核兵器は人間を壊し続ける残酷な兵器なのです。

今年5月、アメリカの現職大統領として初めて、オバマ大統領が被爆地・広島を訪問しました。大統領は、その行動によって、自分の目と、耳と、心で感じることの大切さを世界に示しました。

核兵器保有国をはじめとする各国のリーダーの皆さん、そして世界中の皆さん。長崎や広島に来てください。原子雲の下で人間に何が起きたのかを知ってください。事実を知ること、それこそが核兵器のない未来を考えるスタートラインです。

今年、ジュネーブの国連欧州本部で、核軍縮交渉を前進させる法的な枠組みについて話し合う会議が開かれています。法的な議論を行う場ができたことは、大きな前進です。しかし、まもなく結果がまとめられるこの会議に、核兵器保有国は出席していません。そして、会議の中では、核兵器の抑止力に依存する国々と、核兵器禁止の交渉開始を主張する国々との対立が続いています。このままでは、核兵器廃絶への道筋を示すことができないまま、会議が閉会してしまいます。

核兵器保有国のリーダーの皆さん、今からでも遅くはありません。この会議に出席し、議論に参加してください。

国連、各国政府及び国会、NGOを含む市民社会に訴えます。核兵器廃絶に向けて、法的な議論を行う場を決して絶やしてはなりません。今年秋の国連総会で、核兵器のない世界の実現に向けた法的な枠組みに関する協議と交渉の場を設けてください。そして、人類社会の一員として、解決策を見出す努力を続けてください。

核兵器保有国では、より高性能の核兵器に置き換える計画が進行中です。このままでは核兵器のない世界の実現がさらに遠のいてしまいます。

今こそ、人類の未来を壊さないために、持てる限りの「英知」を結集してください。

日本政府は、核兵器廃絶を訴えながらも、一方では核抑止力に依存する立場をとっています。この矛盾を超える方法として、非核三原則の法制化とともに、核抑止力に頼らない安全保障の枠組みである「北東アジア非核兵器地帯」の創設を検討してください。核兵器の非人道性をよく知る唯一の戦争被爆国として、非核兵器地帯という人類のひとつの「英知」を行動に移すリーダーシップを発揮してください。

核兵器の歴史は、不信感の歴史です。

国同士の不信の中で、より威力のある、より遠くに飛ぶ核兵器が開発されてきました。世界には未だに1万5千発以上の核兵器が存在し、戦争、事故、テロなどにより、使われる危険が続

いています。

この流れを断ち切り、不信のサイクルを信頼のサイクルに転換するためにできることのひとつは、粘り強く信頼を生み続けることです。

我が国は日本国憲法の平和の理念に基づき、人道支援など、世界に貢献することで信頼を広げようと努力してきました。ふたたび戦争をしないために、平和国家としての道をこれからも歩み続けなければなりません。

市民社会の一員である私たち一人ひとりにも、できることがあります。国を越えて人と交わることで、言葉や文化、考え方の違いを理解し合い、身近に信頼を生み出すことです。オバマ大統領を温かく迎えた広島市民の姿もそれを表しています。市民社会の行動は、一つひとつは小さく見えても、国同士の信頼関係を築くための、強くかけがえのない礎となります。

被爆から71年がたち、被爆者の平均年齢は80歳を越えました。世界が「被爆者のいない時代」を迎える日が少しずつ近づいています。戦争、そして戦争が生んだ被爆の体験をどう受け継いでいくかが、今、問われています。

若い世代の皆さん、あなたたちが当たり前と感じる日常、例えば、お母さんの優しい手、お父さんの温かいまなざし、友だちとの会話、好きな人の笑顔…。そのすべてを奪い去ってしまうのが戦争です。

戦争体験、被爆者の体験に、ぜひ一度耳を傾けてみてください。つらい経験を語ることは苦しいことです。それでも語ってくれるのは、未来の人たちを守りたいからだということを知ってください。

長崎では、被爆者に代わって子どもや孫の世代が体験を語り伝える活動が始まっています。焼け残った城山小学校の校舎などを国の史跡として後世に残す活動も進んでいます。

若い世代の皆さん、未来のために、過去に向き合う一歩を踏み出してみませんか。

福島での原発事故から5年が経過しました。長崎は、放射能による苦しみを体験したまちとして、福島を応援し続けます。

日本政府には、今なお原爆の後遺症に苦しむ被爆者のさらなる援護の充実とともに、被爆地域の拡大をはじめとする被爆体験者の一日も早い救済を強く求めます。

原子爆弾で亡くなられた方々に心から追悼の意を捧げ、私たち長崎市民は、世界の人々とともに、核兵器廃絶と恒久平和の実現に力を尽くすことをここに宣言します。

2016年（平成28年）8月9日

長崎市長 田上富久

平和への誓い

幼い頃「神の国日本、ほしがりません勝つまでは」などと教えられて過ごした私は、相次ぐ空襲に逃げまわり、防空壕で息をひそめ、日本の敗戦は近いと思っていました。

1945年8月9日、午前11時2分、アメリカが投下した一発の原子爆弾は、ここ浦上の上空およそ500メートルで爆裂し、長崎の町は、一瞬にして廃墟となりました。

原子雲の下は、想像を絶する修羅場となり、日本人だけでなく、強制連行された中国人や動員された朝鮮人、戦時捕虜のアメリカ人や諸国の人々を含むおよそ74,000人が無差別に殺され、虫や鳥や植物などすべての生き物も死滅しました。

私は当時9歳、爆心地から6.5キロメートルの地で大木に登り枝落としの最中に、巨大な火の玉に目が眩み、耳をつんざく大音響と猛烈な爆風で吹き飛ばされ気を失いました。

翌日から、救護活動に参加した母や姉、兄などの体験で、惨劇の大きさを知りました。その母も姉も兄も歯ぐきから血を出し、髪が抜けるなど、長い間の苦しみに耐えながらも、次々に原爆症で亡くなりました。

広島で歓迎されたオバマ大統領は、「空から死が降ってきた。」と叙情的に表現されましたが、広島のウラン型原爆に対して長崎にはプルトニウム型原爆が投下された事から、私には2種類の原爆による実験ではなかったのかとの思いがあります。

被爆した町は、国際的な支援のもとに復興しましたが、私たち被爆者は71年もの間、毎日が苦悩の中にあり、2世、3世もその憂いを引き継いでいます。政府には「原爆症」や「被爆体験者」の救済について、司法判断に委ねず、政治による解決を望みます。

しかし、私たちは絶対悪の核兵器による被害を訴える時にも、日中戦争やアジア太平洋戦争などで日本が引き起こした過去の加害の歴史を忘れてはいません。

わが国は、過去を深く反省し、世界平和の規範たる「日本国憲法」を作りこれを守って来ました。今後さらに「非核3原則を法制化」し、近隣諸国との友好交流を発展させ、「北東アジアの非核兵器地帯」を創設することによりはじめて、平和への未来が開けるでしょう。

政府に対しては、日本国憲法に反する「安全保障関連法制」を廃止し、アメリカの「核の傘」に頼らず、アメリカとロシア及びその他の核保有国に「核兵器の先制不使用宣言」を働きかけるなど、核兵器禁止のために名誉ある地位を確立される事を願っています。

科学の発展が人類の幸せに貢献せず、資源の独占と貧富の差が拡大する限り、世界の不安定は益々激しくなるでしょう。オバマ大統領が率先して示された「核なき世界実現」への希望は、人類の英知による恒久平和をめざすものであり、「非核の国々による核兵器禁止のための国際的流れ」に共通するものと思います。私たちは、オバマ大統領が「最後の被爆地長崎」を訪問されるよう強く願い、歓迎いたします。

私たち被爆者は、「武力で平和は守れない」と確信し、核兵器の最後の1発が廃棄されるまで、核物質の生産、加工、実験、不測の事故、廃棄物処理などで生ずる全世界の核被害者や、広島、福島、沖縄の皆さんと強く連帯します。長崎で育つ若い人々とともに「人間による安全保障」の思想を継承し、「核も戦争もない平和な地球を子供たちへ！」という歴史的使命の達成に向かって、決してあきらめず前進することを誓います。

地球市民とともに核兵器廃絶の実現を！！

ナガサキ マスト ビー ザ ラスト

2016年(平成28年)8月9日

被爆者代表 井原 東洋一